249
3
14

通俗刑法治罪法附則註解

瀧錬太郎編輯

完

明治十六年十二月

報告堂

036096-000-9

特14-331

通俗刑法治罪法附則註解

瀧　錬太郎／編

M16

BBP-0749

特14
331

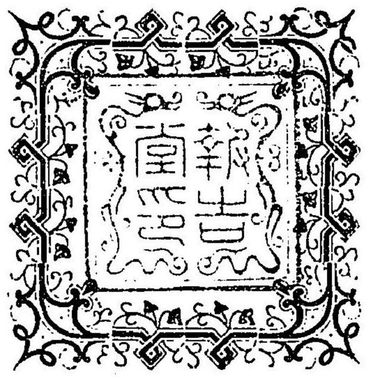
通俗刑法治罪法註解 完

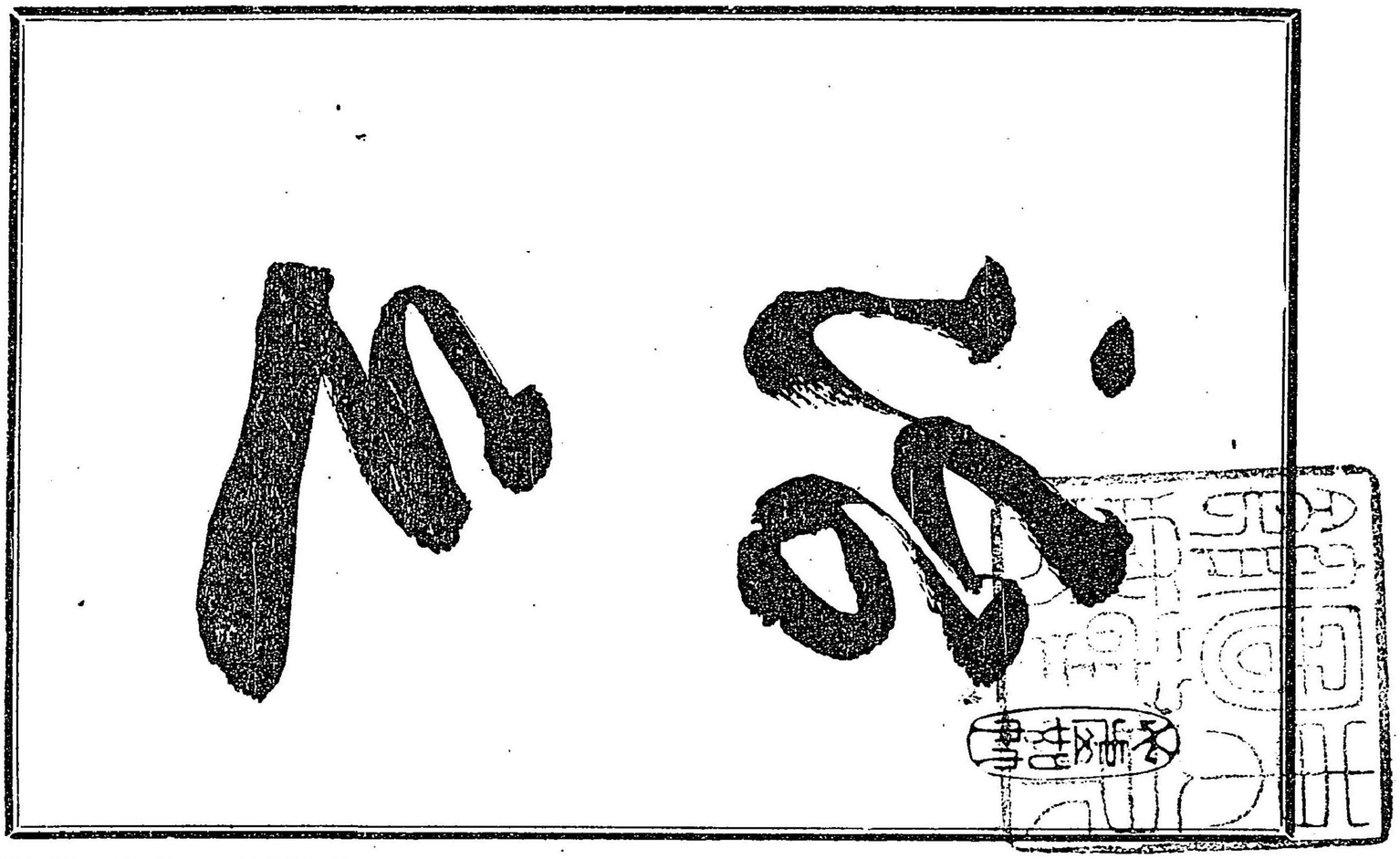
瀧錬太郎編輯

附則

明治十六年十二月

報告掛





跋

明治十年春正月

謂之跋

一橋藏書
淺田氏藏

例言

一國民の國法を知らさるゝ可からさるゝ固とより論を竢たさるなり鄙ゝ先輩の之を解說する者相ひ尋て而して出つと雖も然ども皆な文理高尚意義深遠以て童蒙婦女子の誦讀ゝ便する者蓋し亦た甚た稀なり今此の篇之れを釋くゝ俚言を以てし之れゝ冠するゝ通俗を以てす抑も亦た以へありと云爾豈ゝ敢て其の驥尾を慕ふと謂ゝん乎

一凡そ刑書の文一字義を具し一句理を藏す仔細之を釋すれゝ則ち固とより一小册子の能く載する所ゝ非さるなり今一一之れを竭さす間々其の梗概を擧て以て之れを解く或ゝ一語ゝして而して首尾推して以て知る可き

者皆な下同の一句を其の始めに置き後ち意を以て之れを求めしむ凡そ此の如きの類皆な以て簡便に従ふあり一法語理義必ず知るを要して而して之れを釋くに亦た多言を須もる者間々或い其の義を彼此に解て而して其の理を此に挙け或い併せて而して之れを後ちに掲く読者宜く首尾通観して而して之れを知了すへきを要す

明治十三年より後ち現時に至るまて布告布達若くい達其の法文の須て以て唇歯を相ひ爲す者今盡く掲けて而して各之れを其の條下に隷し又た參看の字を加へて以て之れを表す亦た以て省覽の便に従ふと云ふ

明治十六年十二月

編者識

通俗刑法註解目錄

第一編　總則

第一章　法例　（自第一條至第五條）

第二章　刑例　（自第六條至第六十五條）

第一節　刑名

第二節　主刑處分

第三節　附加刑處分

第四節　徵償處分

第五節　刑期計算

第六節　假出獄

第七節　期滿免除

第八節　復權

第三章　加減例　（自第六十六條至第七十四條）

第四章　不論罪及ヒ減輕（自第七十五條至第九十條）
第一節　不論罪及ヒ宥恕減輕
第二節　自首減輕
第三節　酌量減輕
第五章　再犯加重（自第九十一條至第九十八條）
第六章　加減順序（第九十九條）
第七章　數罪俱發（自第百條至第百三條）
第八章　數人共犯（自第百四條至第百十四條）
第一節　正犯
第二節　從犯
第九章　未遂犯罪（自第百十一條至第百十三條）
第十章　親屬例（自第百十四條至第百十五條）
第二編　公益ニ關スル重罪輕罪
第一章　皇室ニ對スル罪（自第百十六條至第百二十條）
第二章　國事ニ關スル罪（自第百二十一條至第百三十五條）
第一節　內亂ニ關スル罪
第二節　外患ニ關スル罪
第三章　靜謐ヲ害スル罪（自第百三十六條至第百八十一條）
第一節　兇徒聚集ノ罪
第二節　官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪
第三節　囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪
第四節　附加刑ノ執行ヲ遁ルヽ罪
第五節　私ニ軍用ノ銃礮彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪
第六節　往來通信ヲ妨害スル罪
第七節　人ノ住所ヲ侵ス罪
第八節　官ノ封印ヲ破棄スル罪
第九節　公務ヲ行フヲ拒ム罪（自第百八十二條至第二百三十六條）
第四章　信用ヲ害スル罪

第一節　貨幣ヲ僞造スル罪
第二節　官印ヲ僞造スル罪
第三節　官ノ文書ヲ僞造スル罪
第四節　私印私書ヲ僞造スル罪
第五節　免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ僞造スル罪
第六節　僞證ノ罪
第七節　度量衡ヲ僞造スル罪
第八節　身分ヲ詐稱スル罪
第九節　公選ノ投票ヲ僞造スル罪
第五章　健康ヲ害スル罪　（自第二百三十七條至第二百五十七條）
第一節　阿片烟ニ關スル罪
第二節　飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪
第三節　傳染病豫防規則ニ關スル罪
第四節　危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第五節　健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪
第六節　私ニ醫業ヲ爲ス罪
第六章　風俗ヲ害スル罪　（自第二百五十八條至第二百六十三條）
第七章　死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪　（自第二百六十四條至第二百六十六條）
第八章　商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪　（自第二百六十七條至第二百七十二條）
第九章　官吏瀆職ノ罪　（自第二百七十三條至第二百九十一條）
第一節　官吏公益ヲ害スル罪
第二節　官吏人民ニ對スル罪
第三節　官吏財產ニ對スル罪
第三編　身體財產ニ對スル重罪輕罪
第一章　身體ニ對スル罪　（自第二百九十二條至第三百六十五條）
第一節　謀殺故殺ノ罪
第二節　毆打創傷ノ罪
第三節　殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第四節　過失殺傷ノ罪
第五節　自殺ニ關スル罪
第六節　擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
第七節　脅迫ノ罪
第八節　墮胎ノ罪
第九節　幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪
第十節　幼者ヲ略取誘拐スル罪
第十一節　猥褻姦淫重婚ノ罪
第十二節　誣告及ヒ誹毀ノ罪
第十三節　祖父母父母ニ對スル罪
第二章　財産ニ對スル罪（自第三百六十六條至第四百二十四條）
第一節　竊盜ノ罪
第二節　强盜ノ罪
第三節　遺失物埋藏物ニ關スル罪
第四節　家資分散ニ關スル罪
第五節　詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪
第六節　贓物ニ關スル罪
第七節　放火失火ノ罪
第八節　決水ノ罪
第九節　船舶ヲ覆沒スル罪
第十節　家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
第四編　違警罪（自第四百二十五條至第四百三十條）

通俗刑法註解

瀧錬太郎　註解

第一編　總則

第一章　法例

第一條　凡法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルコヲ得ス

一　重罪
二　輕罪
三　違警罪

第二條　法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

第三條　法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコヲ得ス
若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條　此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルコヲ得ス

第五條　此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ
若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ揭ケサル者ハ此刑法ノ總

○刑法　凡そ人の權利ある各人之れを伸暢そるを得べし然れ共一己の權利を行ふか爲め他人の自由を害するか如きハ是れ亦た社會の公義を失ひ固より張權の本旨に非す故よ此の刑法ハ己れの自由を公衆の中よ恣まゝよして他人の權利を妨くる者の爲め數種の苦痛即ち各々相當の罰例を設け強きを抑へ弱きを助け公義中正の標準を立て人民相互の權利を保護そ是れ國家を維持そるの大典あり苟も我か日本の內よ在る者孰れをか此の法よ依ふさる可けんや

○第一編　總則　此の刑法ハ大別ニて四編とあす即

ち第一編總則第二編公益ヨ關する罪第三編身体財産ヨ對する罪第四編違警罪是れあり總則と雖下第二編より第四編までの條目を實行するヨ通ー用ゆる所の刑法規則を取束ねて此ヨ示　○第一章

すあり

法例

此の刑法ヨ定めさるおさてを用ふる例規を示　○第一條

すあり

法律

おさて、下も三種之に同ー

法律

みとをり、即ち重罪下もの三罪あり也き罪、即ち死刑より禁獄までヨ當る罪を云ふ下も之れヨ同ー輕罪ころき罪、即ち禁錮より罰金までヨ當る罪を云ふ、下も之れヨ同ー違警罪いまヨ違ふ罪、即ち拘留科料ヨ當る者を云ふ、下も之れヨ同ー尚ほ下も第四編ヨ詳ふ　○第二條

かあり

正條

罪とあるべき、下も之れヨ同ー所爲ー云ざ、下も之れヨ同ー　○第三條

頒布

出ー

所犯

せー所ろの罪、犯罪と云ふも同ーとあり、下も之れヨ同ー

判決

を經さる者

新

すまぬ者

舊の法

新法と云ひ舊法とい新律綱領改定律例改正條例等の如き以前用ひたる舊るきおきてを云ふ、下も

則ニ從フ

第二章　刑例

第一節　刑名

第六條　刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條　左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　無期流刑
五　有期流刑
六　重懲役
七　輕懲役
八　重禁獄
九　輕禁獄

第八條　左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一　重禁錮
二　輕禁錮
三　罰金

第九條　左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一　拘留
二　科料

第十條　左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一　剝奪公權
二　停止公權
三　禁治產
四　監視
五　罰金
六　沒收

第十一條　刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ撿束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節　主刑處分

第十二條　死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨撿シ獄內ニ於テ之ヲ行フ

第十三條　死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

之れよ比照くふべてふ同ー比照す、即ち何れ重きの何れ輕きのを見合するを云ふ、下も之れよ同ー處斷とりさばく、ー下も之れよ同ー

○第四條　適用あてもちふ、下も之れよ同ー　○第五條　他の法律規則此の刑法の外郵便電信鐵道銃獵賣藥新聞其の他の諸規則條例及び讒謗律等を總稱す

○第二章　刑例ーおきの名及びーおきを行ふの例規を示す　○第一節　刑名仕置の名を記す　○第六條　主おもある仕置、即ち第七條より第九條まてよ記ーたる者と云ふ、下も之れよ同ー　附加刑主刑よ付け加へて併ひ行ふ所の仕置を云ふ即ち第十條よ揭けたる者あり、下も之れよ同ー　○第七條　記載かきの　死刑常事犯國事犯の別あく之れを用ゆ、下も第十二條以下よ詳ふかあり　徒刑、懲役常事犯よ限り之れを用ゆ定役よ服す、徒刑ハ第十七條以下懲役ハ第二十二條よ詳ふかあり　流刑、禁獄國事犯よ限り之れを科す定役よ服せす、

第十四條　大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス
第十五條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス
第十六條　死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルコトヲ許サス
第十七條　徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス
第十八條　徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス內地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス
第十九條　徒刑ノ四六十歲ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス
第二十條　流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス
有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス
第二十一條　無期流刑ノ四五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルコトヲ得
有期流刑ノ四三年ヲ經過スル者亦同シ
第二十二條　懲役ハ內地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歲ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス
第二十三條　禁獄ハ內地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス
重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス
第二十四條　禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス
禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス
第二十五條　定役ニ服スル四人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舍ノ費用ニ供シ其幾分ヲ四人ニ給與ス但現役百日以內ハ給與ノ限ニ在ラス
第二十六條　罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス
第二十七條　罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月內ニ納完セシムヘシ若シ限內納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス
罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過クルコトヲ得ス

流刑ハ第二十條以下禁獄ハ第二十三條ヨリ詳カナリ ○第八條 重禁錮 常事犯ヨリ限リ之ヲ用フル定役ヲ服ス 輕禁錮 多クハ國事犯ヨリ用フ定役ヲ服セス 共ニ科料ヲ附加ス 重輕禁錮ハ第二十四條ヨリ詳カナリ 罰金 常事犯國事犯共ヨリ用ユ 第二十六條以下ヨリ詳カナリ ○第九條 拘留 常事犯即チ違警罪ヨリ用ユ 科料 常事犯即チ違警罪ヨリ用ユ 第二十八條以下ヨリ詳カナリ ○第十條 剝奪公權 重罪ノ刑ヨリ附加ス 下モ第三十一條以下ヨリ詳カナリ 停止公權 重罪ノ刑ヨリ附加ス 下モ第三十五條以下ヨリ詳カナリ 監視 重罪ノ刑ヨリ附加スル時ハ宣告セス又科ヨリ本刑ヲ免レ唯タ監視ノミヲ附スルモアリ但タ此ノ刑ハ主刑ノ終リシ日ヨリ始ム他ノ附加刑ト稍少シ異アルヲ以テ第三十七條以下ヨリ詳カナリ 罰金 宣告ヲ用ヒ禁錮ノ刑ヨリ附加ス 第四十二條ヨリ詳カナリ 沒收 宣告ヲ用ユ重輕罪通用ス 又タ沒收ノミヲ用フルトアリ

若シ禁錮限內罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス 親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同シ

第二十八條 拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス 其刑期ハ一日以上十日以下トシ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十九條 科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下トシ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第三十條 科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日內ニ納完セシム若シ限內納完セサル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第二節 附加刑處分

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

一 國民ノ特權

二 官吏トシテ爲ルノ權

三 勳章年金位記貴號恩給ヲ有スルノ權

四 外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權

五 兵籍ニ入ルノ權

六 裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス

七 後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス

八 分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財產ヲ管理スルノ權

九 學校長及ヒ敎師學監ト爲ルノ權

第三十二條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公權ヲ行フヲ停止ス

第三十三條 禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ身分權ヲ剝奪ス

第三十四條 輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行フヲ停止ス

第三十五條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル者亦同シ

第三十六條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治產ノ禁ヲ自ラ財產ヲ治ムルヲ禁ス

第三十七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付ス

第三十八條 輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルヲ得ス

第三十九條 死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告

り、下も第四十三條以下に準ず
かあり ○第十一條 執行下も之れに同一 犯人とが八、下も之れに同一 檢束する方法 取り締りの一かた 細目 こまかき 條もく ○第十二節 主刑處分 第七條より第九條までに記したる主刑のさばき方を示すあり ○第十二條 絞首 のんぞを一め殺すあり 臨檢 立ち會ひ獄内牢屋のかをそると 獄内 まへ内ち ○第十三條 命令 言ひ付け、下も之れに同

ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス
第四十條 監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス
若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス
第四十一條 監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得
第四十二條 附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス
第四十三條 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ
一 法律ニ於テ禁制シタル物件
二 犯罪ノ用ニ供シタル物件
三 犯罪ニ因テ得タル物件
第四十四條 法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス
之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第四節 徵償處分

一 ○第十四條 大祀 元始祭神嘗祭 新嘗祭大祓等 令節 紀元節 天長節 國祭 孝明天皇仁孝天皇神武天皇後桃園天皇孝格天皇春秋兩季皇靈祭等の諸祭日を云ふ ○第十五條 懷胎 仕置 執行を停め 見合わせる 分娩 身二つになる ○第十六條 遺骸 なきがら 親屬 身よりの者、第百十四條に詳ふかあり 故舊 知り人 下付 さげ渡す 式を用ひて 定めのぎーきを行ふて ○第十七條

第四十五條 刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム
第四十六條 犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラルヽト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カルヽコトヲ得ス
第四十七條 數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム
第四十八條 裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直ニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節 刑期計算

第四十九條 刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ
第五十條 刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス
第五十一條 刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ
一 犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ

島地ニまつはつ發遣差ニつかはす
下も之れニ定役金山或いハ開墾等の
同ニ
人足ハ使ふあり、○第十
下も之れニ同ニ
八條　內地　地つゞきの國　○
第十九條　囚めニつゝ通
常あたりまへ、下體力
もの之れハ同ニ
うで
まへ　○第二十條　流
刑ニハ流ニ、下幽閉ニ推
もの之れニ同ニ
こめ　○第二十一條　經
過すぎ去る、下も行政
之れハ同ニ
の處分　內務卿のさばき
下も之れニ同ニ

起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス
二　檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス
前判宣告ノ日ヨリ起算ス
三　上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ
算入スルヲ得ス

第五十二條　刑期限內逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日
數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節　假出獄

第五十三條　重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ悛改
ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以
テ假ニ出獄ヲ許スヲ得
無期徒刑ノ四ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ
流刑ノ四ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ
用ヒス

第五十四條　徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サルヽト雖ニ仍ホ島地ニ居
住セシム

第五十五條　假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治產ノ
禁ノ幾分ヲ免スルヲ得但本刑期限內特別ニ定メタル監視ニ
付ス

地を限り　場所を定めて、下も之
れよ同ニ　○第二十二條
懲役　こらしめの爲め人
足等よ使ふあり、
下も之れ　懲役場　仕事
よ同ニ

○第二十三條　禁獄
じゆろう、下も
之れよ同ニ　○第二
十四條　禁錮　おし籠
め、下
も之れ　禁錮場　押しこ
よ同ニ　め所
留置　とめおく、下も本
之れよ同ニ
條　其の罪よ相當そる箇
條、下も之れよ同ニ
區別　くちわけ、下も
之れよ同ニ　○

第五十六條　假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直ヲニ出獄
ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルヲ得

第五十七條　刑期限內更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許
サス

第七節　期滿免除

第五十八條　刑ノ執行ヲ遁レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過
スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條　主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一　死刑ハ三十年
二　無期徒流刑ハ二十五年
三　有期徒流刑ハ二十年
四　重懲役重禁獄ハ十五年
五　輕懲役輕禁獄ハ十年
六　禁錮罰金ハ七年
七　拘留科料ハ一年

第六十條　剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス
附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得
沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在
ラス

第二十五條　工錢ハ仕事を爲したる賃錢手間代等ノ規則ニ牢内取締獄舎ノ規則ニ牢屋ノ入費用ニ供シ牢屋ノ入用ニ充ツルそなへ給與あたへる、下も之れニ同ー、此れ罪人放免の後ちもとでとあり現役休み日等を除きて全く科役ニ付きたると○第二十六條　多寡おゝき少きとりきまり、下納完おさめずみ、下も之れニ同ー限内日限即ち一ケ月の内を云ふ割りつけ一日ニ計算すて勘定するおさら更ニ別段ニ、下も之れニ同ー檢察官とゝ謂ふも同ー、下も之れニ同ー裁判官さばき役判事と云ふも同ー、下も之れニ同ー扣除さし引きニ同ー倒へ百圓の罰金を百日の禁錮ニ換へたる時五十日の後ち金五十圓と納むれい前の禁錮の日數ニ併せて全く放免と成るが如ー○第二十八條　拘留ひきとめ、下も之れニ同ー刑期仕置の日限、下も之れニ同ー○

第二十七條　確定ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第二十八條　國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　重懲役
五　輕懲役

第六十八條　國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一　死刑
二　無期流刑
三　有期流刑
四　重禁獄
五　輕禁獄

第六十九條　輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條　禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

第六十一條　期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シ又ハ他ノ罪ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ノ第六十二條　刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ノ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節　復權

第六十三條　公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルヿヲ得主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條　大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條　復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラス

第三章　加減例

第六十六條　法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルヿヲ得ス

○加減例

第二十九條　科料ハ過金、下も之れよ同ー　○第三節　附加刑處分　第十條ヨ記ーたるつけ加への刑さむき方と示そ　○第二十一條　剝奪　公權　人民一般ヨ持ち居る所の權利、下も一より九までの條目即ち是れあり、下も之國民の特權れよ同ー　日本國の人民ヨ限りて持ち得る所ろの權利、例へハ府縣會議員を選舉ー又ハ自ら之れよ選擧せらるゝ等を云ふ　勳章　賞牌　てがふのある勳狀　年金　よ依て年々賜

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルコヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルコヲ得

第七十一條　禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寡數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルコヲ得

第七十二條　拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十三條　附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止タ主刑ヲ科ス

第四章　不論罪及ヒ減輕

第一節　不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十四條　抗拒ス可カラサル强制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若ク

ハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ

第七十六條　本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條　罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラスシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルコヲ得ス

第七十八條　罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條　罪ヲ犯ス時十二歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歲以上ノ者ハ情狀ニ因リ滿十六歲ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコヲ得

第八十條　罪ヲ犯ス時滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歲ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコヲ得

第三十二條　終身一生のあひだ　○第三十三條　現任の官職　當時務めて居る役柄　停止さーとめ、下も之れよ同ー　○第三十五條　自から財産を治むるを禁す　自身の金錢家財を自由よ扱ふことを差ー止て我が身のあり丑ね他人のつき合等をさせぬあり治産の禁と云ふも此の事あり　○第三十七條　短期三分の一　短期といみぢうき日限あり、例へい本條よ三年以上五年以下とある若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十一條　罪ヲ犯ス時滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十二條　瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルコヲ得

第八十三條　違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルコヲ得ス

第八十四條　此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節　自首減輕

第八十五條　罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ二等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條　財產ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減等ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ一等ヲ減ス

第八十七條　財產ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十八條　此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ揭ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節　酌量減輕

第八十九條　重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルコヲ得

法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルコヲ得

第九十條　酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

時其の內の短き日數即ち三年の三分一よて一年よ當るの　監視　主刑の日限如ー　すみたる後ち我が家よ歸ると雖とも倘ほ後日の犯罪を防く爲め舊の町內或ハ村預の如く其の地の警察署よ預けてみもりを爲さーむる者を云ふ、下も之れよ同ー　○第三十九條　期滿免除　定めの年限を過くるよ依て罪をもるーのぞくあり、第五十八條以下よ詳ふかあり　○第四十條　起算　かそへ始む、下も之れよ同ー　成りたる日　とふりたる日　○第四十一條　情狀　ありさま、下も之れよ同し　○第四十二條　主刑滿限　主刑の年限の滿ちたると、主刑滿期、主刑の終りと云ふも同し下も之れよ同ー　○第四十三條　物件　品もの、下も之れよ同ー　沒收　とりあぐる　法律よ禁制したる物件　おきての內よ差ー止めある物、即ち　犯罪の用よ供したる物件　惡事を爲すに用ひたる物及ひ爲んとーて用意ー　○第四節　徵償處分　裁判入費或ハ損耗の償たる一切の道具、即ち人と殺ーたる及物等の類

ひ等の取り立て方を示すあり　○第四十五條　刑事の裁判費用　証人鑑定人等の手當其の他呼出狀送達等の諸入用を云ふ　全部殘ふせ、下も之れよ同ー　犯人よ科す　各人より取立つる　額金だか、下もるす、下も之れよ同ー　被害者　損耗を受けたる人　請求　おひもとむ、下も之れよ同ー　賦物　盜み物其の外總て不正よて取りたる物、下も之れよ同ー　還給　かへーあたふ、下も之れよ同ー　還付と云ふも同ー事あり　○第四十六條　審判　さばき、下も之れよ同ー　○第五節　刑期計算　九條　計算　かんでうそると、下も之れよ同ー　曆よ從ふ　閏ふの有るとあきとよ拘はらず總て曆よのせたる一年の日數を用ゆ　受刑の初日　初めて仕置をうけたる日　算入　かそへこむ　○第五十一條　上訴　裁判不服よて更めて控訴裁判所或ひ大審院等へ訴ふるを云ふ、但た檢事より裁判破毀を求むるあり犯人自ふ不當を訴ふるあり、上告と云ふも同ー事あり、下も之れよ同し　上訴正當　申立ての趣き其の理よ當る　前判宣告　最初のさばき　不當無理　後判二度目の保釋　呼出ありー時ひ出頭をへたの証據とーて保釋金の言ひ渡ー　保釋を納め又ひ保証人を立てゝ吟味中よ宿預けを願ふあり、下も之れよ同ー　預け　身より又ひ知り人よ上みより預けおくをいふ、下も之れよ同ー　責附　之れよ同ー　○第五十二條　逃走　のがれさる、下も之れよ同ー　○第六節　假出獄　各か人改心の摸樣ある時仮りよ牢より出て其の家よ歸ねふそる事を記すあり　○第五十三條　謹守　つゝしみまもる　悛改の狀　悔悟謹身　刑期四分の三　例へひ四年の仕置の者三年と過ぎたる後ちの如ー　○第五十五條　治産の禁　自身の金錢家財を支配する事　特別よ定めたる　監視　殊更ふ嚴重よ定めたる監視、即ち住居の場所を限り或ひ夜中の徘徊と差止むる等あり、下も之れよ同ー　○第七節　期滿免除　罪を犯ーたる者仕置と受ずーて定めの年限を過きたる時ひ其の罪のきゆる事を示すあり、但た其の年限ひ罪の輕重よ依り差別あり下もよ詳ふかあり　○第五十六條　將來〳〵後ち　○第六十四條　大赦　總ての咎か人を殘ふさず赦免するあり、下も之れよ同ー　赦狀　赦免の書狀　○第六十五條　例　罪の輕重ひ法律よ定めありと雖とも再犯或ひ自首宥恕等の情狀よ依り其の罪の重くなり又ひ輕くなるの例規あり此の章是れと詳ふかよそ、但た第六十七條ひ常事犯重罪の刑第六十八條ひ國事犯重罪の刑を示すあり　○第六十六條　加減　勅裁　天皇陛下の思ー召ー　減輕　へーて輕くそるあり、下も之れよ同ー

よ同ー ○第六十九條 該る 其の罪よ相當そるあり、下も之れよ同ー の金高 ○第七十一條 減盡 引きつくそ卽ち禁錮の刑期四分の一を一等とーて四等を減亦た寡數そくおきかず、同ー寡數 下も之れよ同ー ○第七十二條 零數 半端の除棄 のぞき棄てゝ勘定のづ 四章 不論罪及ひ減輕 惡事の所行あれども其の場合お依り無罪とーて構ひなき者あり或い幾分を減輕そる者あり此の章其の法を詳ふかおそ ○第一節 宥恕減輕 憐憫を以て其の罪の幾分を輕くそるおり、下も之れお同ー ○第七十五條 抗拒 ふせきこばむ下も之れお同ー 强制 手で 天災又い意外の變 地震雨風火事水難又い戰爭 自己自身 防衞 ふせきまもる ○第七十六條 本屬長官 支配 職務 つとめ掬ふ、下も之れよ同ー ○第七十八條 知覺精神の喪失 心ろ狂ふて何事 是非 よーべんべつわきまへる、下も覺えおきと ○第七十九條 懲治場 惡心を懲ふーめて善心よ立ち返へふーむる爲め 留め置く場所おり、下も之れよ同ー ○第八十條 審按 吟味、下も之れよ同し ○第八十一條 瘖啞 ○第二節 自首減輕 惡事を悔悟ーて自ら訴へ出るよ付き其の罪の輕くおるとを記す ○第八十五條 發覺 あふはるゝ、下も之れよ同ー 謀殺故殺 巧みをふく共さふよ人を殺ーた罪、下も第二百九十二條以下よ詳ふかおり ○第八十六條 財産よ對する罪 金錢家財よ付ての罪、第三百六十六條以下よ詳ふかおり ○第八十七條 被害者 首服 盜まれ人よ向て自狀する者 ○第三節 酌量減輕 惡事の有樣をくみとり原諒す 可き者 罪の模樣よ依りまと宥すべき情實の見ゆる者

○第五章 再犯加重

○第五章 再犯加重 ○第八十九條 再犯 一度罪を犯ーて相當の仕置を受け尙ほ改心せず再ひ罪を犯すよ依りて仕置の重もるとを示そおる ○第九十三條 重 罪の輕きよ對ーて重き者 ○第九十四條 管轄地內 持ち場の內 ○第九十五條 刑期限內 再ひ罪を犯す云ゝ 初めの罪の仕置の年限中お重ねて惡事を爲ーふる者い其の兩罪の內何れか

第九十一條 先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條 先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條 先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年內再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地內ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヿヲ得ス

第九十四條 再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヿヲ得ス

第九十五條 刑期限內再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ッ其定役ニ服ス可キ者ヲ執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服

セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徴收ス

第九十六條　陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十七條　大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス

第九十八條　三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章　加減順序

第九十九條　犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一　再犯加重

二　宥恕減輕

三　自首減輕

四　酌量減輕

第七章　數罪俱發

第百條　重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經ス二罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス

重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス

輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キ者ニ從テ處斷ス

第百一條　違警罪二罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ

重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス

第百三條　數罪俱ニ發シ各本法ニ從テ處斷シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徴償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章　數人共犯

第一節　正犯

第百四條　二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

○加減順序○數罪俱發○數人共犯

罪の重き方より仕置を始むるあり　罰金科料ニ該ル云ヽ　若しくは再度の罪此の二つの中ゐ該る時ハ前後の次第ゐ拘はらず一緒ゐ之を取立つるあり　○第六章　加減順序　再犯の加重及ひ宥恕自首酌量等の減輕を一緒ゐ用ゆる時の順序を示すあり、即ち第九十九條ゟ記しゝる一より四迄の順序ゟ　○第七章　數罪俱發　二つ以上の惡事俱ゟ顯れたる時の處分方を示そあり、但ゝ再犯ハ裁決の後ち犯せし罪を云ひ數罪俱發とハ判決の前ゟ顯るゝ者を云ふ　○第百一條　輕重各其刑を科すの差別おく二罪共ゟ相當の仕置を申付るあり　○第百二條　餘罪の惡事通算　よみ込む、例へ　ゞ前ゟ三十日の徒刑と成り後ち徒刑百日ゟ該る罪の顯れゝる時前後の日數をくり込て殘り七十日の徒刑と成るが如し　○第八章　數人共犯　二人以上多人數よて一緒ゟ惡事を爲しゝる者の處分方と示そ　○第一節　正犯　幾人よても現在惡事を爲しゝる者と

第百五條　人ヲ敎唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第百六條　正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重スル可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ敎唆者ニ及ホスコトヲ得ス

第百七條　犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ敎唆者ヲ算入シテ多數ト爲スコトヲ得ス

第百八條　事ヲ指定シテ犯罪ヲ敎唆スルニ當リ犯人敎唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法敎唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ敎唆者ヲ處斷ス

一　所犯敎唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止タ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス

二　所犯敎唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節　從犯

第百九條　重罪輕罪ヲ犯スコトヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幇助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

正犯と云ふ、下も之れに同じ　○第百五條　教唆人をそゝのかして惡事を爲さしむるを云ふ、下も之れに同じ　○第百八條　指定さし定む　○第二節　從犯自身げに居て窃かに犯人を助け或い犯人に智惠を付ける者を從犯と云ふ、下も之れに同じ　○第百九條　器具を給與し　惡事の道具をあたへるいさおるみちびく、即ちそゝのかして惡事と爲さしむる　指示さしめそ、即ち其の手たて等を　豫備　惡事の用意を爲そ　幇助たすけおり　容易たやすくする

第九章　未遂犯罪

第百十條　身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス

正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルコトヲ得ス

第百十一條　罪ヲ犯サントシテ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第百十二條　罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第百十三條　重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルコトヲ得ス

違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章　親屬例

第百十四條　此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ

第十章　親屬例　此刑法の中よりの者と稱ゆる者の例規を示す

○第百十四條　配偶者めおと　兄弟姉妹の子　おい　父母の兄弟姉妹

をぢ父母の兄弟姉妹とを父母の兄弟姉妹の子いとこ配偶者の兄弟姉妹こーうとこ配偶者の父母の兄弟姉妹ーうとーうとめ配偶者の父母の兄弟姉妹ーうとめのけうだい○

第百十五條 此の條い前條の註解と見るべー高曾祖父母ひこぢいぢゝ外祖父母ひぢいぢゝ繼父母いばゝ養父母ゝ

お嫡母ゝ本妻を嫡母と稱ふ庶子ゝの子父のや嫡母ゝ本妻を嫡母と稱ふ庶子曾玄孫ひまごひくまごやしゃご外孫むすめまご亦たよめの孫とも云ふ異父ちがわ異母はふちがひ

云ふ

一 祖父母父母夫妻

二 子孫及ヒ其配偶者

三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者

四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者

五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七 配偶者ノ祖父母父母

八 配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條 皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百十九條 皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百二十條 此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二編 公益ニ關スル重罪輕罪

第一章 皇室ニ對スル罪

第百十六條 天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條 天皇三后皇太子及ひ皇族或ハ御陵等總て天朝ヨ對して惡行を爲ーたる罪を記す、我が日本ハ外國と大ヨ異あり皇統連綿昔より絶ることなく我の皇室の安危ハ即ち日本全國の安危よして最も尊ふべき所あり故ヨ此の章を第一ヨ揭くるあり○第百十六條 天皇今上天皇、太皇太后、皇太后、皇后 皇太子御世繼き危害を加へ又はしかくる○第百十七條 不敬ヒ所爲ーわざ 皇陵ミさゝき○第百十八條 皇族天皇三后皇太子の外皇子皇

女皇孫及ひ皇太子のさゝき其他總て皇族の稱へある御一門を云ふ　○第百二十條　此章云々　皇室ヨ對シテハ第百十七條第百十九條ヨ當る者其の他總て輕罪ヨ當る者をも尚ほ必す此條示す所の監視ヨ付す是れ常の犯罪と異る所あるなり

○第二章　國事ニ關スル罪

第一節　內亂ニ關スル罪

第百二十一條　政府ヲ顚覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルコトヲ目的ト爲シ內亂ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一　首魁及ヒ敎唆者ハ死刑ニ處ス

二　群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス

三　兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ處ス

四　敎唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二十二條　內亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已ニ內亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

衆の指揮手下のさゝず樞要の職務はうりとを廻ふす等總て大事の役其情入めけもの金穀を資給し用ゝ金或ひ兵粮等諸般色〻教を送るなり　唆ヨ乘シテ　人のすゝめよのりて附和隨行一味徒黨、下もこれヨ同し指揮を受けて云さーづを聞てはたらきー者　○第百二十二條　彈藥たまくすり船舶軍艦或ひ荷船軍備の

第百二十三條　政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ內亂ト同シク論シ其敎唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第百二十四條　前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第百二十五條　兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他內亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第百二十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス內亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第百二十六條　內亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第百二十七條　內亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二十八條　內亂ニ乘シテ人ノ身體財產ニ對シ內亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節　外患ニ關スル罪

第百二十九條　外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑

ニ處ス

第百三十條　交戰中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥艦艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第百三十一條　本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第百三十二條　陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戰ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第百三十三條　外國ニ對シ私ニ戰端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第百三十四條　外國交戰ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百三十五條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

物品總テ軍ニ用ふる品物劫掠ぶんごう

○第百二十三條　政府を變亂すいの撲滅を謀殺手立てを以かゆる謀殺て人を殺すあり八十五條の下手者解よ詳かあり自ら手をおろして人を殺したる者

○第百二十四條　前三條云ふ前百二十一條より百二十三條迄よ所の者其の謀とを遂くる時い已を其のおさとある故別よ其の仕置を爲そ人あし故よ此の罪よ限り未た爲ー遂けざる者よ其の仕置を爲すあり是を外の罪と異る所ろあり

○第百二十五條　招募まねきつのる準備よふ陰謀くわたて

○第百二十七條　内亂の目あてよ非すして罪と犯ーたる者を云ふ

○第二節　外患

○第百二十八條　本國よ抗敵し日本國よと交戰中のおかだ同方の外國よ手向ひする等の罪を記そ

○第百二十九條　外患ある内亂ある付込みて人を殺ー或い金錢を奪ふ抔總て内亂よ乘して云ふ

○第百三十條　外國の手引をーて我か國を攻め或い外國と戰爭の時身方の外國よ手向ひする等の罪を記そ

○第百三十一條　軍情いくさ機密とり漏泄す兵隊屯集の要地人數と置くべき道路の險夷云々を敵方よ敎へー者間諜もの藏匿まふ

○第百三十二條　委任を受け云々職人のるね通謀しあれ賂遺を收受してまいとと違背そむく缺乏を致しをのく

○第百三十三條　私よ戰端を開きたる者自まいよ戰ひを始めー者、即ちいふぬ腕立てーて外國人を討ち拂ふ抔よ依て國のさわひを起ーよ自國と危ふするよ至る是れ誠よ恐るへきとあり故よ重くこを罪するあり

○第百三十四條　局外中立ちふとも助けぬを云ふ

第三章　靜謐ヲ害スル罪

第一節　兇徒聚衆ノ罪

第百三十六條　兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ說諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ敎唆者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附加隨行シタル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十七條　兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ敎唆者ハ重懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十八條　暴動ノ際人ヲ殺死シ若シクハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス首魁及ヒ敎唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節　官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第百三十九條　官吏其務職ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ

第百四十條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第百四十一條　官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖畫又ハ公然ノ演說ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節　囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第百四十二條　已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百四十三條　已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限内再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

○第三章　靜謐を害する罪　世間をさわがする罪

第一節　兇徒聚衆の罪

第一節　兇徒聚衆の罪　○第百三十六條　多衆多人數嘯聚呼ひあつまり暴動を謀り一揆を企さく官吏より說諭警察官等解散組合をとのさとし○第百三十七條　官廳へ喧鬧縣廳或ハ警察署等へさわがそる村ざと町家等をさわがそる煽動あほりたてる○第百三十八條　倉庫米ぐら金ぐら燒燬やき拂ひ火を放つ火を付ける、放火と云ふも同一とおり下も之れに同一情を知て制せざる者其の事を知ておかぶ差止めざりしもの

第二節　官吏の職務を行ふを妨害する罪

第二節　官吏の職務を行ふを妨害する罪　○第百三十九條　官吏其務職を以て法律規則を執行し又ハ行政司法官署の命令を執行するに當り暴行脅迫を以て其官吏に抗拒したる者ハ四月以上四年以下の重禁錮に處し五圓以上五十圓以下の罰金を附加す

役人に無理を云ふ　村市を騷擾村ざと町家等をさわがそる　煽動あほりたてる○第百三十八條　倉庫米ぐら金ぐら燒燬やき拂ひ火を放つ火を付ける、放火と云ふも同一とおり下も之れに同一情を知て制せざる者其の事を知ておかぶ差止めざりしもの　○第二節　官吏の職務を行ふを妨害する罪　役人ふを妨害する罪役人の役目を行ふをさまたぐる罪　○第百

第百四十四條　未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第百四十五條　囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第百四十六條　囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第百四十七條　囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第百四十八條　囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ又前條ノ例ニ同シ

第百四十九條　前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百五十條　看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

三十九條　暴行脅迫手荒ら𠮟所業を爲ーておどーせまる　○第百四十條　毆打創傷人をうちてきづを負ワそるあり毆傷と云ふも同！とゐり下もこれよ同ー第二百九十九條以下よ詳ふうあり　○第百四十一條　形容あり侮辱あふり侮辱ごり恥刊行そり出そ文書うーむ書さ物又圖畫いろづ　○第三節　囚徒逃走云々ーうそのよげさる時の罪及ひ罪人をのくまふさる者の罪　○第百四十二條　已決さいくつすみ、下もこれよ同ー獄具牢内の道具、即ち手錠くさりのるね毀壞こわち　○第百四十三條　未決まださいけつよ成ふぬ者、下もこれよ同ー入監中逃走　監ハ未決監即ち裁決の濟まぬ者を入置く牢あり此れよ入置きさる者の逃亡するとゐふ原犯もとの罪　○第百四十四條　兇器總て人を殺す道具、下もこれよ同ー因て囚徒

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

以下ノ罰金ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百五十一條　犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルコヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百五十二條　他人ノ罪ヲ免カレシメンコトヲ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十三條　前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節　附加刑ノ執行ヲ遁ルヽ罪

第百五十四條　公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十五條　監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條　前二條ノ罪ハ其刑期限内再ヒ犯シタル時ニ非サ

逃走或致したる時
力ゝを添へさるゟ因て召人のゟげさる時
第百四十七條 劫奪
うゑひとる、下も之れゟ同ー ○第百四十八條 看守 見もりをす護送 附ゎ添ひ、下も之れゟ同ー ○第百五十條 懈怠 おまける、下も之れゟ同ー ○第百五十一條 隱避 知れぬ所ゟひろまる ○第百五十二條 隱蔽 取罪證つそのー ようこのく ○第百五十三條 凡そ前二條の罪云々 身寄り親族の互ゟ其身をかゞふい人情の常あり故ゟ第百四十一條罪人とうくー第百四十二條證據の品物をうくーさる者若ー其の罪人の身寄ある時いかまるおさあり、是れ法律のゆるやうある所あり、但さ此の親属と云ふい第百十四條ゟ詳ふのあり ○第四節 附加刑 執行を遁るゝ罪つけ加へ の仕置と破りさる者の罪 ○第百五十五條 其規則 監視

レハ再犯ヲ以テ論スルコヲ得ス

第五節 私ニ軍用ノ銃礮彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第百五十七條 官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃礮彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

第百五十八條 前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十九條 前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止タ正犯ノ使令ニ從ヒタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百六十條 前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十一條 第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十二條 第百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供スル可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節 往來通信ヲ妨害スル罪

第百六十三條 道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十四條 電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十五條 鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百六十六條 船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐僞ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十七條 前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第百六十八條 第百六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

中の規則 ○第五節 銃礮彈藥 小筒大筒ノ製造ニ關スル ○第百五十七條 官命を受けず 其筋の言ひ付けを受けず 官許を得ず 上みのゆるしを受けず 破裂質火藥又ハ水雷火地雷火の類ヲ製シ又ハ之ヲ所持シ若クハ販賣シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス 情狀ニ因リ罰金ヲ附加スルコトアルヘシ

第百五十八條 前項ノ物品ヲ製造スル爲メ又ハ之ヲ販賣スル爲メ其場所ニ於テ陳列シタル者ハ二月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス 情狀ニ因リ罰金ヲ附加スルコトアルヘシ

第百五十九條 第百五十七條ノ罪ヲ犯シ因テ漂流シ又ハ船舶ヲ覆沒シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第百六十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪

第百六十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入リタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス」

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵內ニ入リタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第百六十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第百七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者

第百六十六條 第百六十五條ノ罪ヲ犯シ因テ漂流ヲ顚覆シ又ハ船舶ヲ覆沒シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第百七十條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節 人ノ住所ヲ侵ス罪

第百七十一條 晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入リタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス」

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵內ニ入リタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入リタル時

二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入リタル時

三 暴行ヲ爲シテ入リタル時

四 二人以上ニテ入リタル時

第百七十二條 夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入リタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス」

若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條 故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵內ニ入リタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一 門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入リタル時

二 兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入リタル時

三 暴行ヲ爲シテ入リタル時

四 二人以上ニテ入リタル時

第百七十四條 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條 官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條 看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八節 官ノ封印ヲ破棄スル罪

第九節 公務ヲ行フヲ拒ム罪

第百七十七條 陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條 陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者

第百六十三條 器械道具 單に其用に供す可き者 只さへ錢鉋さま用ひて外よ用ゐさ品物 ○第六節 往來通信を妨害する罪 人のゆき〳〵いん信をさまさぐる罪

○第百六十二條 橋梁 一河溝のわみぞ 港埠 波止場 ○第百六十三條

僞計 いつはり 威力 うでぢから 阻止 とゞめ ○第百六十

四條 柱木 電信ばー〻 條線 電信の はり金 切斷 さちでん 斷きる 電氣を 不通に 致しさる 者 電信の通ひを止めさる者 ○第百六十五條 瀧車 おのうへよひょうしき 目ト うき 標識るー 危險障礙 さまさげ ○第百六十六條 燈臺浮標 燈明ぐい 又ハ 航海の安寧を保護する 標識 渡海の安全を助くる爲めの目ーるー うきトるー 點示立てー ○第百六十七條 其事務ヲ闕する官吏云々 道路郵便電信瀧車船舶等の掛りの役人或ハ其の雇ひ人職人等の其罪を犯ーさる者ハ一等を加ふ是れ其の役目を持ちあつかふ惡事を爲す故ぉ重くそるなりくそるあり ○第百六十九條 船舶 船舶を覆沒づむる ふねをー ○第七節 人の住所を侵す罪 みだりふ他人の栖み家へ蹈み込む罪 ○第百七十一條 畫間 ひるこう 邸宅 いゑ屋 建造物 さて もの 門戸牆壁を踰越損壞し うをうきうべ等を乘りこゑ又ハうちやぶる 鎖鑰を 開き ーまりを 携帶 さづ ○第百七十二條 夜間 夜ち 皇居禁苑 內裡又ハ 離宮行在所 はおれ御殿又ハ御旅館等凡て皇室と汙がそハ常の罪たりとも尙ほ赦そへきぉ非すまーて故ぉく其の搆ぇ中ぉ立入る尤も惡むへき者ぁり故ぉ書間犯ーさる者ハ第百七十一條ぉ照ー夜中の者ハ第百七十二條就中夜間の如きハ平人の家と雖とも二條ぉ照ー各々之れぉ一等を加ふるぁり但さ此前二條ぉ同ーとぁり ○第百七十三條 主人之を防くが爲め誤て犯人を殺そとも其の罪ゐき者とそる ○第八節 官の封印を破棄する罪 上みのふういんをやぶりそてる ○第百七十五條 毀壞 こぼちやぶる、毀損損壞破罪 毀破壞ぉと皆ぉ同ーとぁり ○第九節 公務を行ふを拒む罪 故ぉくーて官の御用を務めぬ罪 ○第百七十六條 將校くみ〳〵 出兵 兵隊をくようきう もとり出を 要求むる 肯せさる時 うけがわぬをり ○第百七十七條 編入 組みこむ 身體を毀傷づいける 疾病やまひのまんにき 免役 徵兵をの 囑託さの 徵募つの 作爲 しぬとそる 免がれる ○第百七十八條 傳染病はやりやまひ 流行の際 ○第百七十九條 解剖ふわけ、下も之ぶんせき 分析 物の性質を 鑑定 目き れよ同ー はやる 入港 みなとそのにふこう 消滅 其の病毒を打ちけを手立て 獸類毛 ちくるふる 船中の病人 をーふぶる 分別すると 檢查し 其病患を 檢査 しけんさ

第四章　信用ヲ害スル罪

第一節　貨幣ヲ偽造スル罪

第百八十二條　內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第百八十三條　內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十四條　官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ偽造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條　內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十六條　前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

其未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各二等ヲ減ス

第百八十七條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條　偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條　偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

第百九十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條　貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

但シ惡心ヲ非ソーて持ち込みシ者ハ罪ト成ラス

第百八十四條　內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條　內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第百八十六條　前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

其未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各二等ヲ減ス

第百八十七條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條　偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條　偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

第百九十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條　貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

但シ惡心ヲ非ソーて持ち込みシ者ハ罪ト成ラス

の獸醫毛物の醫者牛醫馬醫のるね

○第四章　信用を害する罪人々の心よ不安心の疑ひを起さそる　○第一節　貨幣を偽造する罪　○第百八十二條　內國通用　日本國中行の通用　行使つうふ、下も變造つ之れお同ーりうゆる、即ち十錢紙幣を五十錢お書き直ー或い一錢銅貨おめつきーて一圓お遣ふのるね　○第百八十四條　內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條　內國通用ノ銅貨ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十六條　前數條ニ記載シタル貨幣ノ偽造變造已ニ成テ未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

其未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ偽造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各二等ヲ減ス

第百八十七條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ偽造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十八條　貨幣ヲ偽造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十九條　偽造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ偽造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條　偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ偽造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

第百九十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條　貨幣ヲ偽造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三

あ一例へい試みの爲め持參そるの類○第百九十條 取受 うけとる

○第百九十三條 其償額 そのかくおせ金のおさひのさう○第二節 官印を僞造する罪 御璽國璽及ひ官署の印等總て公けお用ふる印形のおせを作りさる罪 ○第百九十四條 御璽 天子の御印、即ち天皇御璽と彫りて勅任官の辭令書等お用ひふ 國璽 我う國の印おる 國璽 ーて大日本國璽と彫り勳章又い外國への御用書等お之を用ふ

年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第百九十三條 貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ僞造又ハ變造ナルコヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額二倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スコヲ得ス

第二節 官印ヲ僞造スル罪

第百九十四條 御璽國璽ヲ僞造シ又ハ其僞璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條 各官署ノ印ヲ僞造シ又ハ其僞印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百九十六條 產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ僞造シ又ハ其僞印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第百九十七條 御璽國璽官印記號印章ノ影蹟ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル僞造ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ監守者自ラ犯シタル時ハ僞造ノ刑ニ同シ

第百九十八條 官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ

○第百九十六條 產物商品國〻の銘產或ハ賣り物、即ち生絲製茶烟草織物度量衡等の類 押用 おうよう お も 諸府官の記號印章 縣等 おて前お記ーさる品物お證據とーて用ひさるーる

○第百九十七條 影蹟 うつしーつ ○第百九十八條 印紙 烟草 界紙 賣藥 毒藥劇藥證券印紙及ひ訴訟用罫紙證券界紙の類

○第百九十九條 貼用 ちようとりも ○第二節

僞造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百九十九條 已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條 此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 官ノ文書ヲ僞造スル罪

第二百二條 詔書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條 官ノ文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條 公債證書地券其他官吏ノ公證シタル文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債證書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ

官の文書を偽造する罪諸役所の書類おせ筆をおせー罪○第二百二條　詔書天子のみこと　増減變換　文言をまー或いはぶいて其の文面と改るおり○第二百四條　官吏の公證したる文書　府知事縣令區戸長等其他總て官吏の割印或いおく書さーさる書類無記名　持ち主の名前書きさおきもの○第二百五條　其管掌ょ係る文書　自身の受け持ち居る書るる○第四節　私印私書を偽造する罪

印私書を偽造する　人々の自ら用ふる私の實印又い私用の書き付け等を偽筆ーさる罪○第二百八條　印影　紙お据印形のうえ○第二百九條　裏書　賣買ゆづり渡ー等の節証書のうらお其の次第を　交換　引きのゆる、下も之れお同ー○第二百十條　贈遺　贈り物或いも之れお同ー○権利義務ょ關ス

行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ
其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ
第二百六條　官ノ文書ヲ偽造スルニ因テ官印ヲ偽造シ又ハ盗用シタル者ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス
第二百七條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節　私印私書ヲ偽造スル罪

第二百八條　他人ノ私印ヲ偽造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
若シ他人ノ印影ヲ盗用シタル者ハ一等ヲ減ス
第二百九條　爲替手形其他裏書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス
其手形證書ニ詐偽ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ
第二百十條　賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
其餘ノ私書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五節　免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ偽造スル罪

第二百十一條　此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
第二百十二條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二百十三條　官ノ免狀又ハ鑑札ヲ偽造シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ偽造シ又ハ盗用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス
第二百十四條　屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐偽ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
第二百十五條　公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ偽造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條　陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ僞造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條　免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ增減變換シテ行使シタル者ハ亦僞造ノ刑ニ同シ

第六節　僞證ノ罪

第二百十八條　刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事實ヲ掩蔽シテ僞證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一　重罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二　輕罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三　違警罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條　僞證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ僞證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

左ノ例ニ照シテ處斷ス

一　重罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二　輕罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三　違警罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百二十條　僞證ノ爲メ被告人ヲ陷害スル爲メ僞證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一　重罪ニ陷テシムル爲メ僞證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二　輕罪ニ陷ラシムル爲メ僞證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三　違警罪ニ陷ラシムル爲メ僞證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條　僞證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ僞證ノ罪發覺シタル時ハ僞證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル僞證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限內ニ於テ僞證ノ罪發覺シタル時ハ現ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヿヲ得但減シテ前條僞證ノ刑ヨリ降スヿヲ得ス

第二百二十二條　僞證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陷ルヽノ目的ヲ以テ僞證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一

する證書　受取るべき道理渡そべき譯けありて互ひよ後日の爲め書き置きさる證文、卽ち貸金の証文代金其の請取等の者と云ふ

餘の私書　前よ記しさる証書類の外の書面、卽ち手紙或ハ只さの書き付類を云ふ

○第五節　免狀鑑札及ひ疾病證書を僞造する罪

醫者教員等營業の鑑札及ひ醫者の見立書等をおせそる罪

○第二百十四條　屬籍之れお同ー

人べつ、下も身分　華士族平民の差別、下も官吏情之れお同ー

を知て云ゝ　掛りの役人ゟ其の詐りあるとを知りあゟふ免狀鑑札等と下け渡ーさるもの

○第二百十五條

公務を免る可き爲め云ゝ例へハ裁判所其め他諸役所の呼出よ出頭せぬ爲め醫者の名をゟさりて其の見立書を作るの類

○第六節　僞証

の罪　裁判所の証人其の証據と立つる爲め詐りを申述へ

○第二百十八條

さる時の罪

○曲庇　理を非おまげ

て罪人をおーのゞ事實ふ下も之れお同ー事實を掩蔽しまとをおーうくす下も之れお同ー ○第二百二十條 陷害罪おおとそ

第二百二十一條 其刑ふ反坐すさる者お被告人の受けさる仕置を申ー付くるを云ふ ○第二百二十二條 僞證の爲め云ふ此の項より初めい初め被告人を殺その心おくり只さ其の罪を重くせんとーて終ふ死刑ふ成りさる者を云ひ次の若し被告人を死ふ陷る云々とい初めより之を殺さんと思ひて故さふさ其証據を詐りさる者と云ふ ○第二百二十三條 民事人民互ひの約束 商事商業等より起る公事の取引上より起る公事 行政裁判り起る公事上みの扱ひを不當とーて終ふ裁判を起すあり ○第二百二十四條 鑑定其の公事の事柄ふ付て目きゝそると、下も之れふ通事外國人或い同ー おー等の詞そのゐのふぬ者の爲めふ互ひのことゞと取り次くもの ○第二百二十五條 民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ僞證ヲ爲シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十六條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節 度量衡ヲ僞造スル罪

第二百二十七條 度量衡ヲ僞造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ僞造シ又ハ盜用シタル時ハ僞造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條 僞造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條 商賈農工定規ヲ增減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條 人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ僞造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

第八節 身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條 官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齡職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條 官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ內外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節 公撰ノ投票ヲ僞造スル罪

第二百三十三條 公選ノ投票ヲ僞造シ又ハ其數ヲ增減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條 賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ僞證又ハ投票ヲ爲サシメタル者ハ亦僞證ノ例ニ同シ

第二百三十五條 賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂をおくる○第七節　度量衡を僞造する罪　度い物さし量いまたは衡いをうりあり此れ等の品を詐りより作りさる罪を示す　○第二百二十七條　販賣うり　○第八節　欺取財　人をあざむきて金錢を取るあり、第三百九十條以下に詳らかなる罪　○第二百三十二條　官の服飾徽章　役々よ付ての衣服のう　潜用おのしもちふ　○第九節　公撰の投票を僞造する罪　府縣會郡區町村會の議員戸長其の他總代人等を撰擧する入れ札を僞造そる罪　○第二百三十六條　調書を造り云々　調べ書と作りて入れ札の多少等を撰擧人よ知らす可き掛りの者

第二百三十五條　投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ僞造シ又ハ增減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條　調書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ增減シ其他詐僞ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章　健康ヲ害スル罪

第一節　阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條　阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條　阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條　稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條　阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百四十一條　阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十二條　阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十三條　人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルニ至ラシメタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二節　飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十四條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一節　阿片烟ニ關する罪　○第二節　飲料の淨水を汚穢する罪　飲み料の淸水をけがしたる罪　○第二百四十四條　人の健康を害す可き物品を毒あるしあるも水質を變し水のたち

第二百四十五條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節　傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條　傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條　船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スヲヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條　傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條　獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節　危害品及ヒ健康ヲ害スヘキ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條　官許ヲ得スシテ危害ヲ生スル可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條　官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節　健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條　規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節　私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條　官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條　前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ

取リタル保護タモチマモつる、下モ之レヨ同シ○第二百五十二條　過失殺傷あやまちよて人をきづつけ或ハ殺すなり、第三百十七條以下ヨ詳らか○第五節　藥劑くすり混和まぜる○第二百五十四條　劇藥とげしきくすり○第六節　私くすり醫業を爲す罪官のヨ許しおくして自儘ヨ醫者を爲も罪

○第六章　風俗を害

第二百四十二條　人ヲ毆打創傷シ因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節　傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十三條　傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十四條　船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スヲヲ知ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十五條　傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十六條　獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節　危害品及ヒ健康ヲ害スヘキ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百四十七條　官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十八條　官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百四十九條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節　健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條　規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十二條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節　私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十三條　官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上

する罪　風儀を亂るくもる罪　○第二百五十八條　公然おゝやけ猥褻みだりがましきと、下も之れと同し　○第二百五十九條　冊子圖畫　財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十條　賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニ在ラス　○第二百六十一條　賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス　○第二百六十二條　財物ヲ醵集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十三條　神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第六章　風俗ヲ害スル罪

○第二百五十八條　公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス　○第二百五十九條　風俗ヲ害スル冊子圖畫其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス　○第二百六十條　賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十一條　財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十二條　財物ヲ醵集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十三條　神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

○死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

よしてべくちをうちたる者　○第二百六十二條　醵集持ちよる富籤みくじ僥倖利益を望むと云ふやしろ寺又いとう場等總て人のうやまう所にて禮拜いする所にて無禮の行ひを爲す者

第七章　死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

○第二百六十四條　埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十五條　墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス　○第二百六十六條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章　商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

○第二百六十七條　僞計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺

業及ひ農工の業を妨害する罪　第二百六十七條　威力ヲ以テ衆人ノ需用ニ供スル飲食物ノ入用ニ乏クシ又ハ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十八條　僞計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十九條　僞計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十條　農工ノ雇人其雇賃ヲ增サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ僞計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十一條　雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ僞計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十二條　虛僞ノ風說ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章　官吏濱職ノ罪

第一節　官吏公益ヲ害スル罪

第二百七十三條　官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セス又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條　兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎭撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サス、又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條　官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二節　官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條　官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條　人ノ身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢事警察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サヽル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條　逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セス

百七十六條　擅ニ威權ヲ用ヒ云フ所ノ權ヘ以テ人ヲシテ其ノ爲サヾルヘカラサルコトヲ爲サシムルヲ謂フ

第二百七十八條　逮捕官吏　召捕リ掛リノ役人　程式規則　定メノ方法　不正ニ人ヲ監禁シ　不法ニ人ヲ監禁シ又ハ不正ニ人ヲ監禁シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條　水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クヿヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十二條　裁判官檢事及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十三條　裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百八十四條　官吏人ノ嘱託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽キ其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十五條　裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條　裁判官檢事警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑

刻モ之レヨリ同シ　○第二百八十二條　被告人　訴ヘラレタル人、下モ之レヨリ同シ　陵虐　非道　○第二百八十三條　受理　取リ上ケ、下モ之レヨリ同シ　遷延　ノビ〳〵　審理　取調ラヘ、下モ之レヨリ同シ　○第二百八十四條　之ヲ　人ノ賴ミヲ聞キスル者　○第二百八十六條　枉斷　依怙アル　枉ケサル

百八十七條 情を徇ひ云々 被告人の人情を憫れまされ又は遺恨を含むこと ○第三節 官吏財産に對する罪 役人か上みの金錢を付て犯したる罪 ○第二百八十九條 自ら監守する所 自身のあづかるところ ○第二百九十條 諸般の入額 色々の納め物 正數外の外

此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條 裁判官檢事警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾サミ被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條 前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節 官吏財産ニ對スル罪

第二百八十九條 官吏自ラ監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ增減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九十條 租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金穀ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

○第三編 身體財産に對する重罪輕罪 人のからだ又は金錢其の他總て動産不動産に係る罪を云ふ ○第一章 身體に對する罪 人を殺し或はきづつくる罪 ○第一節 謀殺故殺の罪 心中よりあれこれと手立てを思按して其の手立てを以て人を殺すを謀殺と云ひ手立の思按も何もなく唯ずひたすらに殺そ可ーと思ひ込みて故さふ殺したるを故殺と云ふ

○第二百九十二條

第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪

第一章 身體ニ對スル罪

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條 豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條 毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條 故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條 支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條 重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カルヽ爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條 人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條 謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀故殺ヲ以テ論ス

豫め謀て兼て巧らみて

第二百九十四條　故意を以てと　○第二百九十五條　支解折割　五体を斬り離し腹をたち割る等總て嬲り殺しよすざんにくむごたるあり　慘刻らし　○第二百九十七條　詐稱誘導　いつはりて危き場所より引き出す　○第二節　毆打創傷の罪　人をうちてきづをおはする罪　○第二百條　瞎目をつぶす　第二百九十九條　人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス　第三百條　人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀敗シ若シハ知覺精神ヲ喪失セシメタル者ハ輕懲役ニ處ス　第三百一條　人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムヿ能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス　第三百二條　重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カル、爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ　第三百四條　毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス　第三百五條　二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルヿ能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但敎唆者ハ減等ノ限ニ在ラス　第三百六條　二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セストト雖モ幇助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス　第三百七條　健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス　第三百八條　人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス　第二節　殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪　第三百九條　自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス　第三百十條　毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ前後ヲ知ルヿ能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヿヲ得

聾つんりようし　兩肢手陰陽男女の陰部　篤疾　重きやまい、下も之れよ同し　殘廢かたわはいしつすとおす　癈疾たれやまい、下も之れよ同し　○第三百四條　誤て他人を創傷したる者　人ちがいよて他人を毆打創傷したる者　○第三百五條　共毆二人以上よりて重傷手　○第三節　殺傷に關する宥恕及び不論罪　人を殺傷する罪よ

付ての宥恕減輕及び其の罪を搆ひざるしとするの例規を立つるあり　○第三百九條　不正の所爲より因り云々　己れの惡業より因り人より亂暴を仕向けられたる者　○第三百十一條　本夫おつと、下も之れより同し　姦通間男を捕ゆると、下も之れより同し　覺知さとりしる、下も之れより同し　先より姦通を縱容前々より其の妻の密通と見のがしたる者　○第三百十二條　防止ふせぎとむ　○第三百十四條　生命いのち、下も之れより同し　○第三百十五條　盜犯を防止云々　盜賊を防ぎ又い盜まれ物を取り還す時　○第三百十六條　已むを得ざるより非す云々　夫れまでの事より非ず又い其の事の濟みざる後ち己れの氣勢よりのつて押て亂暴人を殺傷しさる者　○第四節　過失殺傷の罪　人をあやまち誤て殺傷しさる罪　○第

第三百十一條　本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條　晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條　前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第三百十四條　身體生命ヲ正當ニ防衛シ已ムヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十五條　左ノ諸件ニ於テ已ムヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス

一　財產ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二　盜犯ヲ防止シ又ハ盜贓ヲ取還スルニ出タル時

三　夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出テタル時

第三百十六條　身體財產ヲ防衛スルニ出ルト雖モ已ムヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルヲ得

第四節　過失殺傷ノ罪

第三百十七條　疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條　過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節　自殺ニ關スル罪

第三百二十條　人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條　自己ノ利ヲ圖リ人ヲ敎唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節　擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十二條　擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第三百二十三條　擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十四條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百二十五條　擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節　脅迫ノ罪

第三百二十六條　人ヲ殺サント脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セント脅迫シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以下十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十七條　兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百二十八條　親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第三百二十九條　此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節　墮胎ノ罪

第三百三十條　懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條　藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條　醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條　懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ詐騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條　懷胎ノ婦女ナルコヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシメタルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百三十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癈篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

三百二十七條　疎處かりと慣習仕おゝせし、して慣習下も之れよ同し

○第五節　自殺よ

闘する罪　自害よ付ての罪

○第三百二十條　其他自殺の補助　總て自害の手傳ひ

○第六節　擅よ人を逮捕監禁する罪　勝手よ人を捕縛拘留する罪

○第三百二十三條　制縛　自由をとむる

拷責ごうもん

○第七節　脅迫の罪　人をおとしかくる罪

○第三百二十九條　此節よ記載したる罪云ゝ　此の脅迫の罪い之れを受くる所の人よりて其の心中大よ異あるあり例へい小兒女子等を脅かすと軍人を脅かすと異あるか如し故よ此の罪い其の當人又い親屬よ非れい其の心中を推し計るを得さるを以て其の告訴を待て後ち其の罪を論そ

○第八節　墮胎の罪　孕みたる子をおろそ罪

○第三百三十一條

墮胎せしめたる者 身籠りの婦人に恵智を付けて其の子をおろさせたる者 ○第三百三十二條 穩婆 取り擧げ婆下も之れに同し 藥商 くすりや ○第三百三十三條 詐騙 さぎ 律に於ては廿才以下の者は皆な之れを幼者と爲せ、下も之れに同し、但し此の一節は八才未滿を云ふ ○第九節 幼者又は老疾者を遺棄する罪 老疾者 老年の者又は病人、老者疾者と云ふ 遺棄 見そつる ○第三百三十四條 幼者又は老疾者を遺棄したる者 一年以下の重禁錮に處す 自ら生活する能はざる老者疾病者を遺棄したる者亦同し ○第三百三十五條 八歳に滿ざる幼者又は老疾者を寥闃無人の地に遺棄したる者は四月以上四年以下の重禁錮に處す ○第三百三十六條 生活 くらし もと 給料を得て人の寄託を受け保養す可き者前二條の罪を犯したる時は各一等を加ふ ○第三百三十七條 幼者老疾者を遺棄して癈疾に致したる者は輕懲役に處し篤疾に致したる者は重懲役に處し死に致したる者は有期徒刑に處す ○第三百四十條 自己の所有地又は看守す可き地内に遺棄せられたる幼者老疾者アルコトを知て之を扶助せず又は官署に申告せざる者は五日以上六月以下の重禁錮に處す ○第十節 幼者を略取誘拐する罪 第三百四十一條 十二歳に滿ざる幼者を略取し又は誘拐して自ら藏匿し若くは他人に交付したる者は一年以上三年以下の重禁錮に處し五圓以上五十圓以下の罰金を附加す 其誘拐して自ら藏匿し若くは他人に交付したる者は六月以上二年以下の重禁錮に處し二圓以上二十圓以下の罰金を附加す 第三百四十二條 略取誘拐したる幼者なるコトを知て自己の家屬と爲し又は其他の名稱を以て之を收受したる者は前二條に照し各一等を減す 第三百四十三條 前數條に記載したる罪は被害者又は其親屬の告訴を待て其罪を論ず但略取誘拐せられたる幼者式に從ひ婚姻を爲したる時は告訴の效なし 第三百四十五條 二十歳に滿ざる幼者を略取誘拐して外國人に交付したる者は輕懲役に處す ○第十一節 猥褻姦淫重婚の罪 第三百四十六條 十二歳に滿ざる男女に對し猥褻の所行を爲し又は十二歳以上の男女に對し暴行脅迫を以て猥褻の所行を爲したる者は一月以上一年以下の重禁錮に處し二圓以上二十圓以下の罰金を附加す

第三百四十七條　十二歳ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條　十二歳以上ノ婦女ヲ强姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス

藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ强姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條　十二歳ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ强姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス但强姦ニ因テ癈篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十二條　十六歳ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條　有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節　誣告及誹毀ノ罪

第三百五十五條　不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル僞證ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百五十六條　誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三百五十七條　誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條　惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハス左ノ例ニ照シテ處斷ス

一　公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二　書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十

第十節　略取誘拐ぜられ行くあり

○第三百四十三條　僕婢下部男と爲し又は女

百四十四條　略取誘拐せられたる幼者かどはかされたる者往く先きよて定めの式よ依て已よ其の者の妻或い夫となりたる時

告訴の効なし　訴へ出るとも其の詮なく取上げられぬあり、下も之れよ同し

○第十一節　姦淫夫婦よ非る男女の密通すると、下も之れよ同し　重婚　已よ人と婚姻したる者又は重ねて餘人と婚姻するあり、下も之れよ同し　○第三百四十八條　藥酒を用ひ云々　睡り藥を飲ませ又い酒よ酔わする等　○第三百五十條　前數條よ記載したる云々　此の前數條の罪い之を公けよする時い其害を被りたる婦女の名を汚し操ほを破り後日出世のさとりと成ると以て誰れとても之を蔽ふい人情あり故よ此の罪い其の本人或い重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ

第三百五十四條　配偶者アル者重ネテ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

親屬の申立てよ非れいれを問ひさるあり第三百四十四條の例も同く其の名を惜みてのことあり

○第三百五十二條　男女の淫行を勸誘して十六才以下の男或いは女よすゝめて他人と通せし媒合其の密めさる者通を取持つと

○第三百五十三條　有夫の婦ある婦人相姦する者の相手本の男夫の告訴を待て其の罪を論す本條の罪いは夫の名譽を汚さぬ爲めよ設けさる者よして他人よりこれと告くれいは却て其の名を損するなり故よ親屬の告訴も其の詮なく必す本夫の訴へと待て其の罪を論そるあり

○第十二節　誣告

第三百六十四條　子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條　祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條　死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヲ得ス

第三百六十條　醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

第三百六十一條　此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第十三節　祖父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條　子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但癈疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ

第三百六十三條　子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但癈疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十六條　子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百六十七條　推問ひさし

○第三百五十八條　醜行見よくきてあひ摘發出す事實の有無を問いす其の事の有ると無きとよ依ふそ

公布ふする世間へる雜劇おどり芝居の類偶像人形

○第三百五十九條　誣罔全くおき事を有りと言ふと

○第三百六十條　神官僧侶坊主委託さのみ、下も之れよ同し陰私内しよ他人よも漏告らすあり

○第三百六十一條　此の節よ記載したる云ゝの罪も亦さ名譽を汚すと以て他人の告訴を許さゝるあり

○第十二節　祖父母父母よ對する罪

己れの下いゞ、兩親等よ對する罪第百十五條を見合すべし

○第三百六十五條　特別の宥恕云ゝ祖父母父母を殺傷しさる者い何如あるいこれありての事

り共第三百九條より第三百十六條まてゝ記したる殺傷の宥恕及ひ不論罪等の例ゝ依て其の罪を減輕するとなし是れ不孝の罪ハ國より天地の容れさる所ゝ尤も赦す可からさる者ありるの意おく其の父母ゐるを知ふすして爲ーさる者ハ減輕するとあるあり故ゝ此の刑ゝ限り罪の減輕を許さゞるなり但ゝ其の素より父母を殺傷す

○第二章　財産ニ對スル罪

第一節　竊盜ノ罪

第三百六十六條　人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條　水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條　門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入リ竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百六十九條　二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條　兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入リ竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條　自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條　田野ニ於テ穀類菜菓其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十三條　山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百七十四條　牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條、此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條　祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節　強盜ノ罪

第三百七十八條　人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條　強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一

十二條　田野　田畑　菜菓　やさん　くゞ物

○第二百七十二條　田野ニ於テ穀類菜菓其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

十三條　礦物　金類或ハ石類

○第二百七十三條　山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦前條ニ同シ

總て土中より掘り出す物　生養　仕立てる

○第二百七十四條　牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

○第二節　強盜　押し込み　追ひ剝ぎの類

○第二百七十五條、此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○第二百七十六條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

○第二百七十七條　祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

八條　強取　無理取り、下もそれゝ同

○第二百七十八條　人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

條　一個毎ゝ　一とつゝと云ふと、即ち二人ゝて犯ーる者を一とのゞゝて一等を加へ一人ゝて兇器を持つ者も一とつと

○第二百七十九條　強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一

とし て一等を加ゆ若し二人より兇器を持つ時は二等を加ふるあり ○第三百八十一條 其取還を拒く爲んとて初めより強盗と見做すあり ○第三百八十二條 醉ひ盜あれとも盜み品を取り還さるゝを遁んとて亂暴を爲したる者は矢張り強盜と見做すあり ○第三百八十三條 醉ひ迷せし 正体あさ迄も人を醉とする ○第三節 遺失物落し 物 埋藏物 地中より埋めたる物 ○第三百八十四條 遺失及ひ漂流の物品を拾得て隱匿し所有主に還付せす又は官署に申告せさる者は十一日以上三月以下の重禁錮に處し又は二圓以上二十圓以下の罰金に處す ○第三百八十五條 他人の所有地内に於て埋藏の物品を掘得て隱匿したる者は前條に同し ○第三百八十六條 此節に記載したる罪を犯したる者第三百七十七條に揭けたる親屬に係る時は其罪を論せす ○第四節 家資分散に關する罪 ○第三百八十八條 家資分散の際其財産を藏匿脫漏し又は虛僞の負債を增加したる者は二月以上四年以下の重禁錮に處す ○第三百八十九條 家資分散決定の後債主中の一人又は數人に其負債を私償して他の債主を害したる者は一月以上二年以下の重禁錮に處す ○第五節 詐欺取財の罪及ひ受寄財物に關する罪 ○第三百九十條 人を欺罔し又は恐喝して財物若くは證書類を騙取したる者は詐欺取財の罪と爲し二月以上四年以下の重禁錮に處し四圓以上四十圓以下の罰金を附加す ○第三百九十一條 幼者の知慮淺薄又は人の精神錯亂したるに乘し因て官私の文書を僞造し又は增減變換したる者は僞造の各本條に照し重きに從て處斷す ○第三百九十二條 人を欺罔し又は恐喝して財物若くは證書類を騙取したる者は詐欺取財の罪と爲し二月以上四年以下の重禁錮に處し四圓以上四十圓以下の罰金を附加す ○第三百九十三條 幼者の知慮淺薄又は人の精神錯亂したるに乘して其財物若くは證書類を授與せしめたる者は詐欺取財を以て論す

條 漂流の物品 流れ寄りたる品物 ○第四節 家資分散 家財をあれこれへ分配すること、即ち身代限りの類 ○第三百八十八條 脫漏 拔かしもらす、即ち故さらに品書きの内より書き落すその類 虛僞の負財 財産を匿そ爲め餘人と相對して僞りの借財を拵ゆるあり 契約を承諾し 相對して借用證文を拵ゆるあり 媒介 中立ち周旋すること ○第三百八十九條 牒

とーて一等を加ゆ若ーニ人よて兒器を持つ時ハニさのとゝーて二等を加ふるあり ○第三百八十二條 其取還を拒く爲ゑ云ゑハ初めを拒く爲ゑ云ゑハ窃盜あれとも盜み品を取り還さるゝを遣ゑゝとて亂暴を爲ーゑる者ハ矢張り强盜と見做すあり

第三百八十三條 酔迷せしめ 正体あき迄ゑ人を酔とする ○第二節 遺失物 落ー物 埋藏物 地中ゑうづめたる物 ○第三百八十五條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十

等ヲ加フ

一 二人以上共ニ犯シタル時

二 兒器ヲ携帯シテ犯シタル時

第三百八十條 强盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條 强盜婦女ヲ强姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條 竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ强盜ヲ以テ論ス

第三百八十三條 藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ强盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十四條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ强盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條 遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條 他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ强盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節 家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條 家資分散ノ際其財産ヲ藏匿脫漏シ又ハ虛僞ノ負債ヲ增加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虛僞ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條 家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百九十一條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シタル者ハ僞造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十一條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シタル者ハ僞造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十二條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十二條 幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條 漂流の物品 流れ寄りの品物 ○第四節 家資分散 家財をあれこれへ分配すること、即ち身代限りの類 ○第三百八十八條 脫漏 拔かしもらす、即ち故さらよ品書きの内よ書き落その類 虛僞の負財 財產と匿そ爲め餘人と相對よて僞りの借財を拵ゆるあり 契約 相對よて借用證文を拵ゆるあり 承諾し 中立ち周旋すること ○第三百八十九條 牒

簿帳面ニ内々ニテ返類私償ヲ弁スルモ

○第五節　詐欺取財

人ヲ欺ムイテ財物ヲ騙リ取ルヲ詐欺取財ト云ヒ人ノ委託ヲ受ケ又ハ自己ノ不動産ト雖モ已ニ抵當ニ入レタルヲ隠シ又ハ重ネテ抵當ニ入レ又ハ賣渡シ又ハ賃貸シテ預リ物ヲ騙リ取ルヲ欺罔ト云フ

○第三百九十條　欺罔ヲ以テ財物ヲ騙リ取ルヲ恐喝ト云フ

○第三百九十一條　恐喝ヲ以テ財物ヲ騙リ取ルヲ恐喝取財ト云フ

○第三百九十二條　詐欺取財ノ犯人ハ十年以下ノ懲役ニ處ス

第三百九十三條　恐喝取財ノ犯人ハ七年以下ノ懲役ニ處ス

第三百九十四條　詐欺取財ノ犯人ハ其情ヲ知テ贓物ヲ收受シ又ハ運搬シ若クハ分量ヲ僞テ人ニ交付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十五條　恐喝取財ノ犯人ハ其情ヲ知テ贓物ヲ收受シ又ハ運搬シ若クハ分量ヲ僞テ人ニ交付シタル者ハ恐喝取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條　他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ賣渡シ交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十七條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十八條　受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十九條　自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脫漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百一條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ揭ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

十二條　動産金錢財寶の類、不動産家藏地面の類、下も之れに同ー

下も之れに同ー

冒認　人の物を我が物ありと言ひ抵當借財の引張ると

下も之れに同ー

欺隱　譯けをかくして人をだますこと

○第三百九十五條　拐帶　持ち逃け取り逃けの類

○第六節　贓物ニ關スル罪

第四百二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管スル罪ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百二十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百三十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百四十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百五十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百六十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百七十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百八十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十一條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十二條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十三條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十四條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十五條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十六條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十七條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十八條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第四百九十九條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

第五百條　贓物ヲ收受シ運搬シ又ハ保管シタル者ハ本犯ノ罪ニ從テ處斷ス

買盜み物あることを知りおから故さらよそを買ひ取るあり　牙保　請け人よ立つ○

第七節　放火失火の罪

付け火ろ〻ら火の罪　○第四百四條　廢屋　そたれたる家柴草肥料しゝ草或いこやし　○第四百五條　人を乘載人をの　○第四百六條　露積雨さらしよつみおくと　○第四百十條　激發す可き物品そげしくとね出そ物地

其人ヲ乘載セサル船舶瀛車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條　火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條　火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條　放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條　火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條　火藥其他激發スヘキ物品又ハ煤氣井蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財産ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分チ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節　決水ノ罪

第四百十一條　堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條　堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

雷火水雷煤氣井瓦斯の火の類　煤　溜め

蒸氣罐蒸漲の湯がま　破裂さる○第八節　決水の罪　隄み等を破りて水を切り落す罪　○第四百十一條　隄防を決潰しつゝみをくずさする　水閘を毀壞して水門を打ち崩す　漂失流す推ー　○第四百十二條　田圃田畑、下ゟ同もゝれー　礦坑金或ハ石類を堀り出す穴　○第四百十三條　水

第四百十三條　他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ防害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條　過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節　船舶ヲ覆沒スル罪

第四百十五條　衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆沒シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條　前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆沒シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節　家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條　人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

利 みづを用ゆるの便利 ○第九節 船舶を覆沒する罪 舟をくつがへす罪、但し此の節ハ故さらよ犯す所の罪を示す其の過ちより出てさる者ハ其の害の償ひを出す耳よて其の罪を赦すあり ○第四百十五條 衝突つきあたる 生き物を動物と云ひ植へ物と植物と云ふ、此の節も亦前節と同一く故意よ出つる者を罪す若一過ちよ依る者ハ此の限りよ非さるあり ○第四百十八條 園ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス 第四百十九條 人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス 第四百二十條 土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 第四百二十一條 人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス 第四百二十二條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 第四百二十三條 前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス 第四百二十四條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

池の裝飾 栽へ木燈籠かき石或ハ池よ架けたる橋等總て庭中のこしらへ 樊圍まわりの柵欄やらかこひ 稼穡 五穀野菜の類 ○第四百二十條 土地の經界を表したる物件 地さかひのしるし 移轉置場をかゆる ○第四百二十三條 前條よ記載をたる以外の家畜 前條よ書きある牛馬の外の飼ひ物 ○第四百二十四條 權利義務よ關する證書 第二百十條の解よ詳らかなり

○第四編　違警罪（違警罪）

罪ハ多ク疎漏怠慢ヨリ生スル者ヨシテ最モ輕キ罪アリ但タ此ノ刑法中ヨ揭ケタル違警罪ハ其ノ大体ヨシテ各府縣ヨ用ユル所ノ例規アリ其ノ細目ノ如キハ各地方ノ便宜ヨリ之ヲ定ムル者トス又タ此ノ罪ハ數罪俱發ノ時モ其ノ刑ヲ併セ科シ及ヒ十六才以上ヨテハ其ノ罪ヲ宥恕セス但タ再犯ハ一違警罪裁判所ノ管轄内ヨテ一年ノ内再ヒスルヨ非スト雖モ及ヒ未遂犯罪ハ其ノ罪ヲ論スルヨアラス　○第四百二十五條　烟火（烟火）人家稠密（人家稠密）山建テツ

第四編　違警罪

第四百二十五條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一　規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者

二　規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三　官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四　人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者

五　蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六　官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サヽル者

七　官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者

八　自己ノ所有地内ニ死屍アルヿヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

九　人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十　密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十一　人ノ住居セサル家屋内ニ潛伏シタル者

みたる火器總て火の出る物を烟筒烟り出ー火竈かまど督促さい崩壊くづるゝ修理手入れつく其媒合容止ろひ賣淫そる者の爲めよ賣り手買ひ手の中を取り持ちそれとやどを貸ーて其の賣淫を爲さーむると潜伏ひそみかくるゝと營生の産業くらーの徘徊さまよう○第四百二十六條近傍もよ水火其他の變云ゝ火事水難の節掛り

十二 定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者

十三 官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

十四 違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者但被告人僞證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ第二百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者

二 水火其他ノ變ニ際シ官吏ニ依リ防禦スヘキノ求メヲ受ケ傍觀シテ之ヲ肯セサル者

三 不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

五 人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サヽル者

六 路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嗾シ又ハ驚逸セシメタル者

七 發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者

八 狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者

九 變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者

役人より之とふせぎとむへーと命せふれあぐふ唯ざ見て居て其の不熟の命を聞のざる者菓物好くつねぬ凹處くぼもの地面のふみ蓋たくぼみ防圍ちぬ爲め圍ひを嗾しけーう驚するあり嗾しくる驚逸牛馬あどを驚ろうーて荒れ廻らずると發狂人ひ氣違狂犬やまいぬ繫鎖つなぎさり罵詈嘲弄のゝしりあざける○第四百二十七條 疾驅とげしくとし燈火あのうす燈火堆積積をあぐ

十 墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者

十一 神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者

十二 公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十七條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

一 濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

二 制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者

三 夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者

四 木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者

五 瓦礫ヲ道路家屋園圃ニ投擲シタル者

六 禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者

七 汚穢物ヲ道路家屋園圃ニ投擲シタル者

八 警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者

九 醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者

十 死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者

十一 流言浮說ヲナシテ人ヲ詐惑シタル者

十二 妄ニ吉凶禍福ヲ說キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシ

る點燈あうりを瓦礫とものすとうるふ投擲あげ小石投げすつる乘擲うつ汚穢物不淨の品物警察の規則雇人請宿旅人宿貸座敷引手茶屋劇場其他總て營業上取締りの規則を云流言浮說根もあきふ說話たましまふ符呪まじあの類軒楹のきさし廁場のわや指道標道を知らしるべするし○第四百二十條通行錢渡ー錢橋

テ利ヲ圖ル者

十三 私有地外ヘ溢リ出ニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者

十四 官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者

十五 路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ圓場等ヲ毀損シタル者

十六 道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者

第四百二十八條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス

一 官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者

二 渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取リ又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者

三 渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者

四 路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者

五 官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者

六 溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者

七 制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者

八 官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者

九 身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者

十 他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者

十一 他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者

第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

一 橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者

二 牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ橫タヘ又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

三 車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

四 水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者

五 氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者

六 官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サヽル者

七 制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戲ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

八 牛馬ヲ牽キ又ハ繫クヿヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

九 出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者

錢の類 劇場芝居觀物場小屋 寄せ席又ハ見世物場の類 羅列ぶるふ刺文ほり 舟筏舟ねの類

○第四百二十九條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下

遊戲あそびたわむれ 放歌高聲大聲を發し或ハ大聲よてうたを歌ふあり 酩酊大酔そ喧噪まーくさ 酔臥ほる 招牌わぐんの類 報告の榜標ーふせの目ドるー 花卉を採折したる者 草木花物を折り取る者

公園の規則　公園地ヨ揭示しある箇條書　各地方の便宜　諸府縣等の其罰則ヨ從て便利　違警罪ハ各地方處斷す　の都合ヨ依り其の便宜を以て定むる所甚だ多く其の條目諸府縣皆ゐ同一ふを故ヨ其の土地風俗の異ゐるヨ從て別ヨ設けたる規則ゐる者ハ各〻其の規則ヨ依て處分そる事を定むるあり

十　通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
十一　道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
十二　酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者
十三　路上ノ常燈ヲ消シタル者
十四　人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
十五　邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
十六　他人ノ田野園圃ニ於テ菜菓ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
十七　公園ノ規則ヲ犯シタル者
十八　通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
第四百三十條　前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ム　ル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス

刑法註解終

通俗　治罪法註解目錄

第一編　總則　（自第三十條至第三十一條）
第二編　刑事裁判所ノ構成及ヒ權限
第一章　通則　（自第三十一條至第四十八條）
第二章　違警罪裁判所　（自第四十九條至第五十三條）
第三章　輕罪裁判所　（自第五十四條至第六十二條）
第四章　控訴裁判所　（自第六十三條至第六十九條）
第五章　重罪裁判所　（自第七十條至第七十六條）
第六章　大審院　（自第七十七條至第八十二條）
第七章　高等法院　（自第八十三條至第九十一條）
第三編　犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審
第一章　搜查　（自第九十二條至第百六條）
第一節　告訴及ヒ告發　（第九十三條ヨリ）

第二節　現行犯罪（第百條ヨリ第百七條至第百十二條）
第一節　檢察官ノ起訴（第百七條ヨリ）
第二章　民事原告人ノ起訴（第百十三條至第百十三條）
第二章　豫審（自第百十三條至第二百三十三條）
第一節　令狀（第百十八條ヨリ）
第二節　密室監禁（第百四十三條ヨリ）
第三節　證據（第百四十六條ヨリ）
第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質（第百四十九條ヨリ）
第五節　檢證及ヒ物件差押（第百七十八條ヨリ）
第六節　證人訊問（第百九十一條ヨリ）
第七節　鑑定（第二百九十二條ヨリ）
第八節　現行犯ノ豫審（第二百十一條ヨリ）
第九節　保釋（第二百十一條ヨリ）
第十節　豫審終結（第二百二十一條ヨリ）
第四章　豫審上訴（自第二百三十二條至第二百六十條）
第四編　公判
第一章　通則（自第二百六十二條至第三百二十一條）
第二章　違警罪公判（自第三百二十二條至第三百三十一條）
第三章　輕罪公判（自第三百三十二條至第三百四十六條）
第四章　重罪公判（自第三百四十七條至第三百七十二條）
第五編　大審院ノ職務
第一章　上告（自第四百十條至第四百三十八條）
第二章　再審ノ訴（自第四百三十九條至第四百四十七條）
第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴（自第四百四十八條至第四百五十條）
第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴（自第四百五十一條至第四百五十八條）
第六編　裁判執行復權及ヒ特赦
第一章　裁判執行（自第四百五十九條至第四百六十九條）

第二章　復權（第四百七十條至第四百七十六條）

第三章　特赦（第四百七十七條至第四百八十條）

○治罪法（ちざいほう）　此の法い刑法よ定めたる法律を實行そるの方法よ一て即ち諸裁判所の組み立て訴訟の手續等を定め諸裁判執行上よ誤謬區々の扱ひ無からん爲め設けさる者あり故よ特よ被害者の其の利を受くるのをあらそ犯罪者も亦た大よ之れか保護を蒙るあり道德を崇尊一公益を保全そるよ於て最も欠く可からざる大典あり

○第一編　總則（そうそく）　此の治罪法を大別一て六編と爲そ即ち第一編總則第二編裁判所の搆成及ひ權限第三編犯罪の搜査起訴及ひ豫審第四編公判第五編大審院の職務第六編裁判執行

通俗治罪法註解　　瀧錬太郎　註解

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヿヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條　公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヿヲ許サヽル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第五條　公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條　刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス

復權及ひ特赦是れあり總則とい下も第二編より第六編迄の條目を實行するよ付ての方法規則を取束ねて之れを此の編よ示そあり

條　公訴　檢察官公衆よ代て其の害とあるとを訴へ出るあり、下も之れよ同ー　**證明**　證據を立るとゝ、下も之れよ同ー　**法律**よ定めさる區別の管轄犯罪の種類等を云ふ　○第二條　**私訴**　人民己れの損害を取戻そ爲め訴へ出る者を云ふ、下も之れよ同し　**犯罪**よ因り生したる損害若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ其ニ其效ナカル可シ

第七條　民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スコヲ得ス刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スコヲ得

第八條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第九條　公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被告人ノ死去
二　告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又　私和
三　確定裁判
四　犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
五　大赦
六　期滿免除

第十條　私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一　被害者ノ棄權又ハ私和
二　確定裁判
三　期滿免除

罪人の爲めよ被害者に蒙りたる損失　**屬す**　其の損を受けたる者より之れを行ふあり　○第三條　**告訴**　其の害を受けたる者より箇樣の罪人ありと訴人そると、私訴と云ふとい大ねよ異るあり、第九十三條以下よ詳ふかあり　**棄權**　下も之れに同し　訴へ出つ可き權力ありるかふ面倒あり手數ありとして其の權利を棄てゝ訴へ出さる者を云ふ、下も之れよ　**消滅**　と、下も之れよ同し　**法律**よ於て特に同し　**定めたる場合**　刑法よ定めた

第十一條　公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一　違警罪ハ六月
二　輕罪ハ三年
三　重罪ハ十年

第十二條　私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條　公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條　期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルコト因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラス

第十五條　起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無

る略取誘拐猥褻姦淫等の如く被害者又ハ其の親屬の告訴を待つ可き者を云ふ　○第四條　附帶　つけそゆる、下も之れよ同し　刑事裁判所　違警罪の吟味を爲す所の裁判所あり第三十一條以下よ詳ふかあり、下も之れよ同し　民事裁判所　人民互の約束金錢貸借等より起る訴訟を吟味する所の裁判所あり、下も之れよ同し

○第六條　共よ其効おかある可し　私訴償還の言渡し公訴主刑の言渡し共よ其の詮あき者とあるあり

效ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時ハ民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第十七條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル塲合ハ此限ニ在ラス

第十八條　此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ晴ヲ以テスル者ハ卽時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日

○第七條　檢察官の起訴云々　被害者一旦民事裁判所よ私訴を爲したる者い檢察官より刑事裁判所よ公訴を起したる時よ非されい妄りよ之れを願ひ下け改めて刑事裁判所よ持出そとを許さゝるあり　被告人　惡事を爲して檢察官又い其の他の者より告訴告發せふれ民事の償ひ又い刑事の仕置を受くべき者、民事擔當人と云ふとい少し異なるあり、下も承諾　承知そ之れよ同し　承諾すると、下も之れよ同し　○第八條　免訴　其の引合を免さるゝと、無罪とい異ある

休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラス但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條　此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

參看　明治十五年二月一日第七號布告治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

第二十條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ塲合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條　訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ屆置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヿヲ得ス

第二十二條　此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作リ書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

參看　便丁規則ハ明治十四年司法省丁第廿六號達及十五年太省

あり、第三百三十五條第三百五十八條第四百條及び第百一條を見合せべし、下も之れよ同し　妨礙（ぼうがい）　さまたげ、下も之れよ同し　○第九條　受理（じゅり）　とり上ぐる、下も之れよ同し　私和（しわ）　雙方熟談よて同一ー整ひたると、下も之れよ同一　確定裁判（かくていさいばん）　裁判の言渡ー故障控訴の日限を過きて上告を爲すの途絶へたる者又ハ法律上控訴上告を許さゝる裁判ありたる者之れを定確裁判と云ふ、下も之れよ同一　期滿免除（きまんめんじょ）　凡そ刑事の期滿免除よ二樣あり一ハ刑法よ定めたる者一ハ治罪法よ定めたる者あり治罪法よ於て單よ期滿免除と稱そハ公私兩樣を兼る者とそ第十一條以下よ詳らかあり、下も之れよ同し　○第十二條　無能力（むのうりょく）　色々の事故ありて其の訴へを爲すの力ら足りぬ者、下も之れよ同し　○第十三條　繼續犯罪（けいぞくはんざい）　ハ監禁し或ハ謀反の企てを爲そ等總て即時よ出來そ久く引續て爲そ所の惡事を云ふ、下も之れよ同し

丁第三十四號達ニ就テ見ル可シ

第二十三條　送達書ハ二通ヲ作リ其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

送達書ハ二通ヲ作リ其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

第二十四條　休暇ノ日及ヒ日出前日沒後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

送達ハ之ヲ受取リタル者ナシテ其二通ニ署名捺印セシムヘシ若シ署名捺印スルコトヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記スヘシ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若シクハ是等ノ者之ヲ受取ルコトヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ

第二十五條　官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカルヘシ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條　官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更增減ノ效ナカル可シ

第二十七條　此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條　此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ牴觸スル規則ハ此限ニ在ラス

○第十四條　民事原告人　損失の償ひを訴出て白洲よて被告人と論辯そることを得る者即ち私訴を起したる本人あり、下も之を起訴よ同ー　初て訴訟を起そと、第百七條以下よ詳ふかあり、下も之れよ同ー　豫審　告訴告發等よ因て被告人を呼出ー罪の有無を見極むる迄の事即ち下た吟味あり、第百十三條以下よ詳ふかあり、下も之れよ同ー　公判　本吟味よ掛ると、第二百六十二條以下よ詳ふかあり、下も之れよ同ー　中斷　半ばよて閉廷ゆると　民事擔當人　民事擔當人ハ被告人よ代て賠償返還を引受る者を云ふ即ち未丁年者の父母又ハ同居の親屬よーて其の監督を爲す者白痴瘋癲人の保管者雇人雇主の命じたる事件を行ふ時其の雇主等の類あり、下も之れよ同ー　○第十六條　原由　譯け柄ふ、下も之れよ同ー　告發人　他人の惡事を見付て之れと訴人する者を云ふ、第九十三條以下と見合すへし、下も之を同ー　惡意　惡心よてわざと被告人よ難儀を掛け又ハ刑法よ定めたる賄賂を收受ー或ハ被告人を陷害そる等の罪と犯そ時ハ其の償ひを求むることを得るあり　過實　事實よ過てハ　敗訴　負けよ公事、下も之を同ー　本案　要償訴と附帶す可き刑事の訴訟を云ふ、下も之を同ー　○第十七條　故意を以て云々　惡心よてわざと被告人よ難儀を掛け又ハ刑法よ定めたる賄賂を收受ー或ハ被告人を陷害そる等の罪と犯そ時ハ其の償ひを求むることを得るあり　○第十八條　此法律　此の治罪法のことを云ふ、下も之れよ同ー　初日　初日を筭入せす　期限を定めたる當日ハ已よ其の幾時間を經過するを以て之を期限の中よ入をす其の翌日より筭ふるあり但た刑法の刑期計算ハ成るへく短きを以て犯人の利とおし此こよ定めたる期限ハ長きを以て本人の利とおす故よ此の如く異あるあり　○第二十條　特別の場合　第二百五十八條第三百十二條第三百十六條見合せ

其の權を失ふ可し　其の事よ付てハ言ゑを發すと同ー　○第二十一條　訴訟關係人　裁判所より書き物類を差出來ぬあり、下も之れよ同ー　書類の送達　送ると、下も之れよ同ー　異議やを云ふと　○第二十二條　所屬の使丁　召ー抱への小使　○第二十三條　其の住所よ於て云々　本人の宅よて渡そなり但た本人よ渡すよハ何所よても構ハぬ其親屬雇人等よハ必そ本人の住所よ於て渡すあり　送達人　書類を送り届くる書き付くる、下も之れよ同ー　附記　書類の一枚毎よ其の役所　署名捺印　姓名を書き印形を押すと同ー　認印　見留め印を押そと　保存　取り置く　○第二十五條　所屬官署　務め所の毎葉よ契印すへし　書類の一枚毎よ其の役所　居る會人五人組又ハ差配人等の其の場よ立合ひそる者、下も之れよ同ー　事由　代署　代筆そると　其の立て立會人の代署ーたる譯よハ本人よ署名捺印の出來ぬ時ハ其の事由を云ふ、下も之れよ同ー　○第二十六條　正本　本書、下も之れよ同ー　謄本　寫ー書、下も之を同ー　改竄　むやみよあらたそうにんと插入　削除　文字を書き入れ又ハ欄外の記入筭引の外よへと字體を存しめて本人の申立てを誤まらそ等の惡行を防くあり　○第二

十七條　頒布以前云々　此の法律以前用ひたる規則よりも便利なる故此法律のふれ出し前の罪よりも之をあて用ゆるあり○第二十八條　抵觸あると　別段の法律　八一事よ係る規則を云ふ

第二編　刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章　通則

第三十一條　通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條　裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條　刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一　犯罪ヲ搜査ス

二　犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三　裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四　裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條　檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第三十六條　裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條　書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條　犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一　違警罪ハ違警罪裁判所

○第二編　刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

重輕罪違警罪を取り捌く裁判所の組み立て及び其の裁判を爲そよ付の力らの制限を示そあり

○第一章　通則　此の第二編の中第二章より第七章迄よ通し用ゆる所の規則を總めて此の章よ示そなり猶は第一編よ總則を置くか如し○第三十一條　通常刑事　國事よ關そる罪の外よて重輕罪違警罪よ該る者總て之れを通常犯罪と云ふ常事犯と云ふも同し事なり、下も之れよ同し

○第三十一條　位置建て置く　管轄受持區可き場所　管轄ち劃わり付け　奏請そう上裁天皇陛下の御裁許　○第三十四條　犯罪を捜査す　住所不分明の犯罪人及び證據物等を尋ね出そなり、第九十二條見合せ　公益を保護す　裁判の不當を上告し或ハ裁判の傍聽を禁せんとを求むる等總て被告人及び社會公衆の利益を保護するあり　○第三十五條　公廷ーらそ、下もこれよ同し　○第三十八條　上等の裁判所　雙方よて何れも裁判權の重き方即ち重罪と輕罪あれバ重罪裁判所輕罪と違警罪あれバ輕罪裁判所よて併てこれを扱ふあり　○第三十九條　同一の場所云々　人を昏倒せしめて家財を奪ひ强盜を爲す爲め門戸を壞る等の類　自己又ハ云々　自身又ハ他の人を殺すが爲めよ得物を盜み或ハ舟車を奪て逃け去るの便を爲す等の類を云ふ、○第四十條　逮捕召取り、下もこれよ同

一　輕罪ハ輕罪裁判所
二　重罪ハ重罪裁判所
三　重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリダル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一　同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時
二　數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時
三　自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルヽ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條　數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一個ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ共管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條　犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルヿ能ハス若クハ法律上逮捕スルヿヲ許サヽル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十五條　外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

隔席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判

し

○第四十一條　數個の裁判所（所〻の裁判所）○第四十二條　最近いたんち送り届くるかき所送致と、下も之れよ令狀（召捕の同し）指圖書　○第四十三條　法律上云々　例へ〻違警罪の如き直ちよ罪人を召捕る事を禁し　最初よ豫審たる者又〻云々　豫審よて〻其の令狀を發しよる日公判よて〻書記局より呼出狀を出しよる日の一たん早き所の管轄とるそより　○

所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條　商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

參看　明治十四年十二月十五日第六十五號布告　商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

商船内犯罪取扱規則

第一條　何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スヿヲ得

第二條　船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯ヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取集シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルヿ能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヿヲ爲スヘシ

第三條　船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事

第四十五條　闕席裁判を爲す可き場合　此れハ外國よて罪を犯したる者内地よても外國よても召捕りよ成らずして欠席の儘裁判ゐす時を云ふ　最終住所　日本よていちばん末よ住ゐたる所　○第四十六條　商船内の犯罪　商船とハ商賣の爲め彼れ此れへ往返よる所の船よして諸會社等の持ち船ゐり此の商船の外ハ即ち官船よして海軍よ屬し其の船中の犯罪ハ皆ゐ海軍律よ從ふゐり故よ此の法律ハ只よ此の商船のミよ關係そ

第四十七條　豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ衰訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第四十八條　裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ヲ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ニヨリ上訴スルヿヲ得

第二章　違警罪裁判所

第四十九條　治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

參看　明治十四年十二月廿八日第八十號布告　本年(九月)第四十八號布告左之通改正ス　違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ　同年十月六日第五十四號布告　刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察

官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得可シ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷內治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

同年十二月廿八日第七十一號布告

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ內其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

同年同月同日第八十三號布告

第一條　治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス

第二條　治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條　治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルコトヲ得ス

第五十條　違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條　違警罪裁判所ハ檢察官ノ職務ハ其裁判所ノ所在ノ地警部之ヲ行フ

第四十七條

とも之れを干預たづさはることを得ず之れを同し

第四十八條

裁決の言渡しを以て尙ほ其の上の憐憫を願ひ出づると雖も之れを同し

第四十八條

故障を以て彼れ此れと難澁不服を言立つるとも之れを同し

第四十九條

自ら其の管轄云々

此の公事は當裁判所より取上げ然るべきや或は他の裁判所へ引渡す可き哉を取りさだめ終審

此の上控訴上告を差許さす此の公事は最早是れより全く濟を切りと云ふ折の調へをいひ、下も之れを同し

第二章　違警罪裁判所

違警罪を吟味する所即ち治安裁判所中に設けたる違警罪裁判所の組立て及び其の權限を示すなり

第五十一條　檢察官の職務

第三十一條に詳らかなり、下も之れを同し

第五十二條　未決

未だ裁決の濟まぬこと、下も之れを同し

既決

早や裁決の濟みたること、下も之れを同し

意見

見込み、下も之れを同し

第五十三條　書記の職務

參看　明治十四年十月十日司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事

同年十月司法省丙第十三號達略之

同十六年二月廿四日司法省丁第九號達略之

參看　明治十四年十二月廿四日司法省甲第五號布達

第五十二條　違警罪裁判所檢察官ハ每月未決既決ノ事件表ヲ作リ輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條　違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章　輕罪裁判所

第五十四條　始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地內ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地內ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

參看　明治十四年十二月廿八日第八十三號布告

第四條　始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第三

第三十七條ヨ詳シカラサル場合ニ於テハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル檢事ノ意見ヲ參酌シ尚ホ疑ヒアルトキハ檢事ニ問合セ之ヲ決スヘシ

第三十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ意見ヲ述ヘタルトキハ其ノ事件ニ付テハ判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ證人ヲ尋問シ又ハ證人ノ尋問ヲ請求スルコトヲ得

第四十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第四十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第五十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第六十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第七十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第八十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十一條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十二條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十三條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十四條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十五條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十六條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十七條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十八條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第九十九條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第百條 檢事ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル場合ニ於テ其ノ事件ニ關シ辯護人ノ辯論ニ對シ意見ヲ述ヘ又ハ辯護人ノ請求ニ依リ證據ヲ提出スルコトヲ得

第三十七條ヨ詳シカラサル場合ニ於テハ豫審又ハ公判ニ立會ヒタル檢事ノ意見ヲ參酌シ尚ホ疑ヒアルトキハ檢事ニ問合セ之ヲ決スヘシ

第三章 輕罪裁判所

第五十五條 輕罪裁判所ハ始審裁判所ノ管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ヲ爲ス

對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

明治十六年一月十日第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以テ其裁判長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ從前ノ通タル可シ

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヿヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續スル可キヿヲ命スルヿヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヿヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指揮ヲ受ケ第二編第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第二編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スル可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戸長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルヿアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第二編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戸長

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルヿアル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

指名 此の事件ハ何某ヲ命ヘシと其の名を指すと、下も之れヲ同し ○第六十條 補佐 ○第六十一條 證憑 證據、下も之れヲ同し 參考 見合せ、下も之れヲ同し 集取 取りあつめ、下も之れヲ同し 囑託 頼み、下も之れヲ同し

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章　控訴裁判所

第六十三條　控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第六十四條　刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコトヲ得

第六十五條　刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルコトヲ得

第六十六條　刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條　檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルコトアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

○第四章　控訴裁判所　輕罪裁判所始審の再吟味を爲す所の裁判所の組立て及び權限を示すあり

○第六十五條　一事件の裁判長　一事件の裁判ゝ付て其の事ざけの長官とあるあり、下も之れゝ同し

○第六十七條　起訴　犯罪人あるとを知て之れを裁判所ゝ訴へ出つると、第百七條以下ゝ詳らかあり、下も之れゝ同ー

告達する　觸れ書を出すと

監督　取り締りをすると、下も之れゝ同ー

○第五章　重罪裁判所

重罪を調ふる所の裁判所の組立て及び權限を示す○第七十一條　夥多　數多くあると、下も之れゝ同し

具申　申立て、下も臨時之れゝ同し

開廳　三月毎の外ゝ裁判を開くあり

役員　職員掛り

陪席判事　重罪の最も重き者

第六十八條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條　刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章　重罪裁判所

第七十條　重罪裁判所ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

第七十一條　重罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七十二條　重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判スル爲メ毎年二月ノ末ニ之ヲ開ク

參看　明治十四年十二月廿八日第七十八號布告參考

第七十三條　重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一　裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二　陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ

あれい其の吟味の不當を防く爲め其の席よ立會ひ一座よ列あるあり、下も之れよ同ー

○第七十六條　閉廳裁判の場所を終わるあり

其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

參看　明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第七十三條第二項ノ陪席判事四名ト相定メ候事

ノ內ニ名ト相定メ候事

明治十四年十月六日第五十五號布告(全文ハ第七十九條ニ掲クルヲ以テ略之)

第七十四條　重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ始審裁判所檢事之ヲ行フ

其職務ヲ行ハシムルコヲ得

第七十五條　重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條　控訴裁判所檢事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

○第六章　大審院

第七十七條　大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一　上告

二　再審ノ訴

三　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條　刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

第七十九條　刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

參看　明治十四年十月六日第五十五號布告

治罪法第七十六條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任ス

第八十條　刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條　刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條　檢事長ハ三月每ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

院の組立て及ひ其の權限を示すあり其の職務ハ第四百十條以下よ詳らかあり

○第七十七條　條件　條目、下も之れよ同ー　檢察官又ハ被告人より原との裁判を不當とーて之れを破毀ーて改て裁判を求むるあり　上告

一　上告

二　再審ノ訴

三　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

但た哀訴も亦た此の中よあるなり、第四百十條以下よ詳らかなり、　再審　下も之れよ同ー　訴　重輕罪の刑言渡しあり、たる後其の事實全く誤りありたる事を知て再吟味を願ひ出つるを云ふ但た之れを爲す者ハ身分よ限りあるあり、第四百三十九條以下よ詳らかあり、下も之れよ同ー

第七十八條　刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

第七十九條　刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

第八十條　刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條　刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條　檢事長ハ三月每ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

裁判管轄を定むる訴　管轄違ひよて其の言渡し濟をたる時又い事故ありて裁判の出來ぬ時其の管轄を定むることを願ふあり、第四百四十八條以下よ詳らかあり

公安又い嫌疑云々　犯罪の性質被告人の身分等よ依り騷動を起し或い公平を害する等れ恐れある時他の裁判所よ其の訴へを引渡すことを願ふあり、第四百五十一條以下よ詳らかあり　○第七十九條　**授任の順序**　判事の役よ就きたる前後の次第　○第七章　高等法院　高等法院い第八十三條よ記したる特別の人即ち皇族勅任官及ひ特別の犯罪即ち皇室或い國事犯等よ關そる罪を吟味そる所あり此の章其の組立て及ひ其の權限を示そあり　○第八十三條　第一章　皇室よ對そる罪　第二章　國事よ關そる罪　○第八十五條　豫め上裁を以て云々　高等法院の裁判長及ひ裁判官よ限り其の時罪人あくとも兼て勅諚を以て年〳〵之れを定め置き其の年の內よ犯人あれい其の裁判を扱ふあり其の餘の掛りい臨時よ之れを設く　豫備裁判官　前六名の中事故ありて欠席ーたる時等の用意よひかへそーて立て置く所の裁判官あり

第八十三條　高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス」

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條　高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ヲ可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條　高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一　裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二　豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條　豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條　高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條　高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條　高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルコトヲ得

一　闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二　第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三　第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條　被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルコトアル可シ

第九十一條　高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

○第三編　犯罪の捜査起訴及び豫審　此の編ハ檢察官及び豫審判事の職務即ち証據物及び罪人を尋ね出そより管轄の裁判所より公判を求る迄の手續を示す

○第一章　捜査　即ち犯罪の捜査よして檢察官より訴へを起そよ付ての手始あり

○第九十二條　認知見留め知る、同思料すおりようそる、同しりようと、下も之れよ

○第一節　告訴及ひ告發　告訴とハ損害を蒙りたる本人よ

第三編　犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章　捜査

第九十二條　檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證憑及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節　告訴及ヒ告發

第九十三條　何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所警察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

り其の趣きを訴へ出つると但た私訴ハ其の償を求むる者告訴ハ罪人あるとを告くる迄のとあり第九十三條より第九十五條迄の者是れあり告發とハ己れ害を蒙らさ共惡事を見出して之れを訴人そるあり第九十六條及び第九十七條即ち是れあり、下も之れよ同ー

○第九十五條

口述（こうじゅつ）口上よて申ー述ると、下も之れよ同ー

○第九十六條

官吏（くわんり）云々　如何ある掛り役人よても其の役目を行ふよ因て見出たる惡事即ち刑法第百三十九條以下第百七十七條第二百三十一條等

第九十四條　告訴人ハ成可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ中立ツ可シ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルコヲ得

第九十五條　告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條　官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルコヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

參看　明治十五年六月十二日司法省丙第二十二號達治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ証人トシテ公庭ヘ呼出ス時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル義ト心得可シ

但巡査及ヒ等外吏ハ此限ニアラス

（丙第十號達ハ二百八十五條參看ニアリ）

第九十七條　何人ニ限ラス重罪輕罪アルコヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條　告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條　告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコアル可シ

第一節　現行犯罪

第百條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條　重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

る者あり故ㇾ告訴告發の手續きㇾつゞきて此ㇾ之れを示ㇾそあり ○第百一條 現行犯ㇾ准す ㇾと一樣ㇾ見做つゝ追呼 おいかけぬすびとと呼ひ立て 兇器 何ㇾ依らずㇾ總て人を殺そㇾ足る物ㇾ皆あ之れを兇器ㇾ云ふ、下も之れㇾ同ㇾ携帶 たずさゆる、下も之れㇾ同ㇾ 檢證 罪人ありたるㇾと見定むる爲め見分そること、下も之れㇾ同し ○第百二條 引致 引立て行くあり、下も之れㇾ同 ○第百四條 訊問 とゝたゞし、下も之れ同ㇾ ○第百六條 正當の事由 尤もある事から

○第二章 起訴 始め て訴訟と起す時の手續きㇾて之れを爲そㇾ二樣あり一を檢察官の起訴とゝし一を民事原告人の起訴とゝあそ此の章其の法方を詳らかㇾそ ○第一節 檢察官の起訴

假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲スヘシ

第百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヿヲ得

第百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヿヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヿヲ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ」

被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヿヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヿヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第百七條 檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲシ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直ヲ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添

 明治十四年九月廿日第四十六號布告 治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其擧動犯人ト思料ス可キ者アルトキハ當分ノ內現行犯ニ准シ處分スルヿヲ得

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルヽ時

二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三 家宅內ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第百二條 司法警察官及ヒ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕スヘシ

違警罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヿヲ得

第百三條 巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ

檢察官先つ告訴告發現行犯等よ依り罪人あるとを知り尋て犯罪の捜査をなし終て公衆よ代り公訴を起すあり此こ其の手續を詳らかよそ

百七條　輕重難易の其

罪の重き輕き其の取調への手重き容易き等の類よ從ひ重きい豫審を求め輕きい直ちよ輕罪裁判所よ訴へ出るあり　公訴受理より可らさる者　罪と成るへきの見込みあれとも只之れを疑念そるのみよて証據の十分ならさる時或い第九條の例よ係る時又い刑法よ定めさる被害者若くい其の親屬の告訴を待つへ

四　被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサルヿ者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條　前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條　檢事豫審ヲ求ムル時ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直ヲニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直ヲニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ乘權ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ効ナカル可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直ヲニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢

き者の類

○第百九條　臨檢

惡事を爲ーさる場所の見分をそると、下も之れよ同ー

○第二節　民事原告人の起訴

第百十條　重罪輕罪の被害者公訴に附帶して私訴を爲さんとする時は告訴と共に之を申立て又は告訴を爲したる後其旨を豫審判事に申立つ可し

豫審判事直ちに被害者より民事原告人と爲る可きの申立　私訴を始むると

○第百十條　公訴

私訴を併せて受理　民事原告人となるの申立てとい罪人の爲よ被りさ

第百十一條　被害者は公訴の本案に付き始審終審の裁判言渡あるまでは何時にても私訴を爲し若くは其要むる所を變更するを得

又私訴の願下を爲したる後更に其申立を爲し若くは其要むる所を變更するを得

第百十二條　被害者は代人に委任して私訴を爲し又は其願下若くは乘權を爲すを得

被害者無能力なる時は法律に定めたる代人之を爲す可し

第三章　豫審

第百十三條　現行の重罪輕罪を除くの外豫審判事は前章に定めたる規則に從ひ檢事又は民事原告人の請求あるに非されは豫審に取掛るを得す此規則に背きたる時は其請求より以前に係る手續の効なかる可し

第百十四條　豫審判事は重罪輕罪に付き直ちに告訴又は告發を受けたる時は召喚狀を以て被告人を呼出し之を訊問するを得若し引續き取調を爲す可き者と思料したる時は其事件を檢

參看　明治十六年三月七日第八號布告

る損害償ひを求むる爲めのことなる故其の償ひを取立つるより先つ其の惡事のさまざまをせねばならぬなり故ㇾ仮令ㇾ檢察官の公訴なくとも尚ほ之れありうる者と見做ㇾ其の方法手續ㇾ依て徴償處分の裁判をも爲ㇾ者とそるなり

○第二章 豫審

第百十五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコヲ得

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閲スルコヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコヲ得

第一節 令狀

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ニ對シ猶豫アル可シ

召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノクトモ出廷ノ日ヲ過クルコヲ得ス

第百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコヲ得

第百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコヲ得

第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコヲ得

一 被告人定リタル住所アラサル時

二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

をあー其の証據を集めて罪の有無と定むる者とす是れ豫審判事の職分あり此の章其の方法を詳らかよそ

○第百十四條 召喚狀

呼出ーの書狀、下も之よ同ー

○第百十五條 勾引狀

引立狀、下も之れよ同ー

勾留狀

引留狀、下も之れよ同ー

○第百十六條 勾留狀を以て

罪人を直ちよ送る云々

へきされ共其の途中よて逃亡をる等の恐れあるを以て先つ之れよ其の勾留狀を發し置きて其の上へよて被の裁判所よ

差遣るあり但し禁錮より以下の刑に處せられたる拘留の外裁決の後ちも尚ほ其の自由を差止むることあり一項に此れに關係中のことあり故に禁錮以上と認めらるる者のみに此の法を用ゆるあり ○第百十七條 檢閲 一らへる、下も之れに同一 必要 必ずしも入用の意に同一 ○第一節 令狀 豫審判事其の職務即ち豫審を爲すに付用ゆる所の書狀にして四樣あり召喚狀勾引狀勾留狀收監狀是れあり之れを總稱して令狀と云ふ以下之れを用ゆる所の方法規則を示すあり ○第百十八條 召喚狀 被告人に答辯を爲さしむる爲め白洲に呼出すに所の命令書あり 出廷 白洲に出頭するを、下も之れに同一 ○第百十九條 明示 明らかにしめす、下も之れに同一 ○第百二十條 勾引狀 召喚狀を受けらるる被告人其の時日出廷せざる時又は其の住所あき時或は尚ほ惡事を爲すの見込みある時引立を行ふ所の命令書あり、下もに詳ふり ○第百二十一條 罪証を湮滅し 惡事の証

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時內ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ ○第百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ ○第百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ放免シタル時ハ其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免ス可シ ○第百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人ノ言渡ヲ爲ス可キ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人疾病其他正當ノ事由ニ因リ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キ其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ ○第百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス ○第百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付スルコトナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キコトヲ豫審判事ニ求ムルヲ得 ○第百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス ○第百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模樣アル時ハ其概略
二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト

○第百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ ○第百三十一條 收監狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記

據を打ちけすとき、火よ入れ水よ弄るの類 ○

第百二十二條 勾引狀執行の命を受けたる者即ち巡查あり勾留狀被告人吟味の爲め又は其の逃亡したる時等其の身を檢束せる爲め留置きを爲すべき爲めの命令書あり但し其の日限は十日よ過くるを得ず下もよ詳ふ

保釋 暫時被告人を宿預けよするあり、第二百十條以下よ詳らの、下もこれよ同ー

○第百二十四條 勾引狀を以て云々已よ勾引狀を發ー

判事即勾引狀を發ー ○

第百二十七條 收監狀

揚り屋入りの命令書なり其の日限よ限りなく且つこれを執行せるよ一層嚴重を加ふるなり下もよ詳し

責付 犯罪取調ふのなり犯罪取調の後ち證據不充分なれ共疑ひの廉ありて猶ほ吟味せざるべき者又は逃亡の恐れなき者又は病よ罹りよる等總て金圓又は證書を取るかでよ非る者を其の身寄又は友よちよ預けて之れが目付を爲さーむる者之れを責

署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ナシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條 召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行スル但時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡查數人ニ分付スルコアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ鄰佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡查ハ被告人ヲ發見シタルトキハ直ニ拘ハラス搜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

參看 明治十四年九月廿日第四十六號布告

家宅搜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スコヲ得ス

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候得共芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日沒後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日出前日沒後ニ拘ハラス

狀を發ーあるを以て其の權力を以て被告人を差送るあり、下もくわんくゎつよしんこれよ同ー管轄豫審判事即勾引狀を發ー ○

第百二十七條 收監狀揚り屋入りの命令書なり其の日限よ限りなく且つ之れを執行そるよ一層嚴重を加ふるなり下もよ詳し

責付 犯罪取調ふのなり犯罪取調の後ち證據不充分なれ共疑ひの廉ありて猶ほ吟味せざるべき者又は逃亡の恐れなき者又は病よ罹りよる等總て金圓又は證書を取るかでよ非る者を其の身寄又は友よちよ預けて之れが目付を爲さーむる者之れを責

豫審判事ハ被告人他ノ管轄地內ニ潛匿シタルヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得

第百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地內ニ潛匿シタルヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得

參看 明治十五年四月十二日司法省丁第廿四號達

左之通豫審判事ニ及內訓候條此旨相達候事

輕罪裁判所豫審判事

治罪法第百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡查ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ上告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ取ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ衆テ注意アル可キ專ナレ氏猶ホ誤解無之樣爲念此段及內訓候也

第百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及

ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシムル可シ

第百三十六條　陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシムル可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閱シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヿヲ證スル能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若ハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及

付と云ふ所謂る親類預けなり但し保釋ゐ被告の願ひを用ひ責付ゐ願ひの有無よ拘わらず上みより之れを爲ー且つ保証を用ゆるとおー、下も之れよ同ー

○第百二十九條

概略　あらまー、下も之をよ同ー　○

第百三十條　容貌　曲豆骨骨格　見目かたち骨ぐみ　○等即ち人相なり

第百三十二條　日本全國に於て之を執行す　勾引狀勾留狀收監狀ゐ之れを發ーる豫審判事の管轄よ於て其の用を爲すのみならず日本國中何所よても其の名指の者を取押ゆるなり

○第百三十三條　潛匿　ひそみかくる　鄰佑ゐ五人組又ゐ差配人等の　○第百三十四條　帶行　携へ行くと

三十六條　在營　兵隊の營所よ居る軍人　親ら軍さるとを爲そへき　行軍　操練或ゐ演習の爲め隊伍を組て出張そると　○第百三十七條

ヒ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閱ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト之ヲ授受スルヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消スヘシ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ免許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ

監倉未決の者を入れ置く揚屋、下も之れよ同ー ○第百三十九條 獄舎已決の者を入れ置く牢屋、下も之れよ同ー ○第百四十條 密室監禁被告人の他の者と相談ーて証據を取消そを防く爲めよ別室よ勾留そるこ故舊知り接見對面そると、下も之れよ同ー 書翰手紙書籍書もしくやりとり、下も之れよ同ー 授受 ○第二節 密室監禁 密室監禁ハ犯人の証據を匿そを防く爲めよ設けさる者故並みの拘留よりハ其方法を一層嚴重よそるを以て別よ其の規則を定むるなり ○第百四十二條 發見見出そと、下もしよくけん役目の之れよ同ー 職權權力、下も之れよ同し ○第百四十四條 別室別〻の坐敷 允許聽きすみ、下も之れよ同ー 貨幣金錢 飲料飲みもの 藥餌くすり ○第百四十五條 更改仕直そと ○第三節 証據 豫審判事犯罪の証據物を取集むる爲め方法手續きを定

又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ナシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第二節 證據

第百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルニ足ルヘキ證據ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徴憑ヲ被告人ノ自狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徴憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第百四十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要トスル證據徴憑ヲ集取ス可シ

第百四十八條 豫審判事臨檢家宅捜索物件差押又ハ被告人証人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ル能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシムル可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢証ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

參看 明治十四年十二月司法省丙第十六號達

治罪法中犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例

むるなり ○第百四十六條 法律ニ於テ云々ノ法律ハ犯罪ノ模様ヲ以テ罪アリト見做スヘキ必ス証據ヲ以テ推測シ定むるなり 推量 官吏ノ檢証 即チ檢察官等ノ檢證ニ犯罪ノ性質其ノ方法等ヲ目キ〻ル為メ豫審判事ヨリ命セラレタル者、下モ之ニ諸般ノ色徴ヲ檢證スルヘキ廉〻ヲ憑ミ、下モ之レニ同シ 判定 判斷スルヲ判定スルト ○第百四十八條 家宅捜索証據物件差押 家宅捜索トハ犯罪ノ證據ト為ルヘキ物ヲ見出ス為メ被告人ノ住家ヘ踏ミ込ミテ其ノ物品ヲ尋ルヲ、下モ之レヲ同シ第百六十二條ニ詳ラカなり 物件差押トハ出ス可キ物ヲ取リ揚ケ或ハ之レニ封印ヲ為ス等ノ類、下モ之レヲ同シ第百六十條以下ニ詳ラかなり 急遽の際トハ急ニ迫ルヲ急遽の際トハ ○第四節 訊問及ヒ對質 被告人ヲ問ヒ糺シ及ヒ其ノ事件ニ關シタル者ヲ對質ニつき合セテ其ノ証據ヲ見出ス時ノ手續ヲ定むるなり ○第百五十條 恐嚇ヲ以テ恐嚇をもーかくるとか 詐言ヲ以テ詐言をもーかつ 第百五十二條ノ規則ニ依リ拇印為致候儀ト心得可シ此旨相達候事

第百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更增減ス可キヲ申立ルトキハ更ニ訊問ヲ為シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞セ署名捺印ス可シ

第百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ摸様ヲ証スル為メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ」

第百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシムヘシ若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

第百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ為ス可シ

第百五十八條 書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシムル可シ

第百五十九條 書記ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

參看 明治十四年十二月司法省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢証及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合ニ巡査ヲ同行シ又ハ所在ノ巡査ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

第百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ為ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ摸様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

第百六十條 豫審判事ハ事實發見ノ為メ必要ナル可キ摸様ヲモ記載ス可シ

又被告人ノ利益ト為ル可キ摸様ヲモ記載ス可シ

所及ヒ摸様ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ摸様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ為シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅捜索物件差押ニ付キ其日ニ

わりを言ひ掛けて其の白狀を釣り出すこと

第百五十一條　訊問及ひ陳述を錄取し

訊問　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルコヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第二項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會フヲ得ス但豫審判ヲシテ立會ハシムルコヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得

但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルトキハ其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ其場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限リ臨檢家宅搜索ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地內ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルコヲ得

參看　明治十四年九月二十日第四十六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコヲ許シタル處分ハ當分ノ內其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコヲ得

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス

れよ同ー

第百五十二條　通事を命す

通事　通事とは双方の語ばを取次きて話す者なり

然れ共つんぼおー等よい別段通事あるとなー故よ平日其の者よ親ミて手まぬを以て私用を足す者よ之れを命するなり

第百五十三條　日本の國語とバ

日本の國語　正ぢき

第百五十四條　正實

通譯　双方のことを直して之れを取次くこと

第百五十五條　宣誓

宣誓　ちかひを立つること

第百五十六條　檢證及ひ物件差押

檢證　豫審判事犯罪の証據をしらべ及ひ其の物件を差ー

押ゆる時の方式を定むるなり ○第百五十九條 方法（犯罪の手立てなり） ○第百六十條 監護 目付けをし物件の失せぬ樣とりしまりをす 遞送 持ち運ひ即ち白洲等へ持ち込む を云ふ ○第百六十一條 周圍（まわり） 閉鎖（しめ切りよーてーまりを付くる等の類なり） 看守者（番人） ○第百六十二條 遲延（のびくーよ）すると、即ち立會人を待合と爲め時日を延と等の類 ○

可シ

第六節 證人訊問

第百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコヲ得

第百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第百七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其

第百六十五條 辯解（いひわけ） 其の品物を爲さしむ のいくたてを言立てさすこと ○第百六十六條 各別（かくべつ）一人〳〵 ○第百六十七條 逐斥（おひはらふ）と ○第百六十八條 開披（くわいひ）封を破ると ○第六節 證人訊問（しようにんじんもん）此の節い犯罪捜査よ付事實發見の爲め原告被告の證人を呼出し之れを糺問そるの方法手續を定むるなり ○第百七十條 員數（ゐんすう）

裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

（參看）（第百六十八條參看全文ニ付略之）

第百七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヲアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キコヲ認可シ又ハ職務上已ムコヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ

人數此限 五名十名の限りを云ふ ○第百七十四條 公務官の御用を始め總て公衆の爲めに務むへき所の事皆な之れを公務と云ふ下も之れに同ー ○第百七十五條 經由其の手を經へ日のへ、下へると 延期も之れに同ー ○第百七十六條 再度二度目、下も之れに同ー 擔當引受くると、下も之れに同ー ○第百七十七條 豫知前より覺悟そると、下も之れに同ー ○第百七十八條 遺失忘れて持參せぬと ○第百八十條 愛憎畏懼 例へい怨みある者よい其の罪を重く言ひ中よき者よい輕く言ひ或いをそろーき者の爲めよい後日を思ふて其の惡事を輕く言立つる宣誓書の爲め等の類 書きたる書類、下も之れに同ー ○第百八十一條 左に記載 第一より第四迄に記ー したる者 左にて所謂る關係の無能力者なり是れ等い皆な其の本人の身寄又或い其恩を受けたる者故た

送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコアル可シ

第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルコ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコヲ證明ス可シ

第百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齡職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ證人ナシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコヲ得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歲未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

とひ宣誓したるとも其尚ほ其の陳述を詐りなりとも言ひ難く且つ強ひて其の陳述を用ゆる共却て其の恩を傷ふ親を欠き人情の爲すへからさる所即ち道徳上尤も取らさる所なり故に此れ等を以て証人と爲すことを禁ふ是等の者即ち被告の本人なり

原告

○第百八十二條　左に記載したる者第一に掲くる者なりと雖も第三迄の刑事の証人となる可き程の分別なき者第四に掲くる者なりと雖も第六迄の己れ一己の悪事を爲したるを以て尚ほ其申立てに不信の嫌疑ある者なり是れ

醫師藥商穩婆又は代言人辯護人代書人公證人若くは神官僧侶其身分職業に關する秘密の事件に付き委託を受けたる者は前項の例に在らす

第百八十四條　證人は他の證人及ひ被告人と格別に之を訊問すへかゝさる所即ち道徳上尤も取らさる所なり故に此れ等を以て証人と爲すことを禁ふ是等の者即ち被告の本人なり

原告

○第百八十二條　左に記載したる者第一に掲くる者なりと雖も第三迄の刑事の証人となる可き程の分別なき者第四に掲くる者なりと雖も第六迄の己れ一己の悪事を爲したるを以て尚ほ其申立てに不信の嫌疑ある者なり是れ

第百八十五條　豫審判事は證人の陳述を確實ならしむる爲め必要ありと認むるときは證人と被告人とを對質せしむることを得

第百八十六條　豫審判事は證人の陳述を確實ならしむる爲め必要ありと認むるときは第百七十六條の規則に從ひ證人宣誓を言渡すへし

第百八十六條　第百五十六條乃至第百五十七條の規則は證人に付ても亦之を適用す

第百八十七條　皇族又は勅任官證人たるときは豫審判事書記と共に其所在に就て陳述を聽くへし

第百八十八條　書記は證人の陳述に付き各別に調書を作るへし

其調書には證人宣誓を爲したる又は爲さゝるの理由を記載すへし

第百八十九條　豫審判事は證人に其陳述の相違たるや否やを知らしむる爲め書記をして調書を讀聞かせしむへし

證人は其陳述を變更増減せんことを請求することを得書記は其請求に因り調書に記載し豫審判事及ひ證人と共に署名捺印すへし若し證人署名捺印すること能はさるときは其旨を附記すへし

第百九十條　證人は即時に出廷に付ての旅費日當を要むることを得

若し日稼を以て生業とする者なるときは旅費日當の外日稼高に等しき償金を要むることを得

本條の場合に於ては豫審判事其金額を定めて之を言渡すへし

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事は犯罪の性質方法及ひ結果を分明ならしむる爲め鑑定人を必要なりとするときは鑑定人に書記局より呼出状を以て之を呼出すへし

第百九十二條　鑑定人は書記局より呼出状を以て之を呼出すへし

鑑定人は犯罪事件に付き鑑定を命するの書を言渡すへきことを記載すへし

其呼出状には罰金を言渡すへきことを記載すへし

鑑定人呼出に應せさるときは第百七十六條の規則に從ひ處分すへし但勾引状を發するの限に在らす

皆な所謂る一般の無能力者なり

公權

剝奪云々　刑法第三十一條以下見合わすへし

現に陳述す可き事件

今まで証人となりて申述ふべき所の公事を云ふ是れ等の者いまだ己れ初めに其証憑を匿したると今の陳述に付て露顯するを畏れ信とを言わざるの嫌疑ある故に之れを証人に立てざるなり

○第百八十三條　代言人

原告或いは被告の頼みを受け其の訴訟に付て本人の代理として法庭に出て其の辯論を爲す者之れを代言人と云ふ下も之れに同じ

辯

護人（ごにん）被告人の頼みを受け又ハ裁判長の命を以て被告人と共ニ法庭ニ在ク本人の爲めニ法理事狀を辯論シ本人を助けて其の罪を輕クセンことを勉むる者之れを辯護人と云ふ、下も之れニ同シ

代書人（だいしょにん）公証人（こうしょうにん）ハ裁判所ニ在テ原告被告の書類を認むる者公証人ハ裁判所ニ在テ民間一切の契約等ニ關係セる者猶ほ區戸長の奥書公証を爲すか如シ然れ共此の二つの者ハ我國未タ有ざる所あり

○第百八十五條　確實（かくじつ）トシ、下も之れニ同シ　犯所（はんしょ）悪事をなシた場所、下も之れニ同シ　同行（どうこう）つれ立ち行くなり、下も之れニ同シ

○第百九十條　旅費（りょひ）路用、下も之れニ同シ　日當（にっとう）日々の手當て、下も之れニ同シ　生業（せいぎょう）なりわひ、下も之れニ同シ

○第七節　鑑定（かんてい）犯罪の模様を見定むるとニて豫審判事其の犯罪の手立て等を分明セる爲めニ之れを爲セ所の法式を定むるなり

○第百九十一條　結果（けっか）つまりの有様、下も之れニ同シ　分明（ぶんめい）とつきりとセること、下も之れニ同シ　學術職業（がくじゅつしょくぎょう）ハ第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十二條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

第百九十三條　鑑定人ノ宣誓シタルコヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルコヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコヲ得

第百九十八條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

第二百條　鑑定人ハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ鑑定人ノ意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與スヘシ

第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコヲ知リタル場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコヲ記載ス可シ

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事ハ輕罪又ハ輕罪ニ當ル可キ犯罪ニ付テハ直ニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコヲ得

第二百三條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手

因り云々　學問又ハ持前の職ヨリて其の摸様を見定むるとの出來る者即ち毒殺なふハ醫者をして腑ヲけを爲さしめ書類の似せ筆ハ書家ヨ其の鑑定を命ずるの類　○第百九十三條　鑑定命令書　其の鑑定を言ひ付けたる時の命令書あり紙尾　紙の末、下も詳記之れヨ同ー　つまびらかな書き記るも、下も之ヨ同し　撿印　受取りさるーの印を押そあり　譯本　翻譯して書きさる書類　○第八節　現行犯の豫審　現行犯ハ豫審の繼續ヲ付ると、第二百二十條以下ヨ詳ふかあり、下も之れヨ同ー　○第二百三條　豫審判事ヨ屬する處分云々　撿事の豫審判事より前ヨ現行犯を見出したる時ヨ限り判事の役目を撿事ヨ貸ーこれを行ヲーむるなり是れ其の處分の急速を要そるか故あり但た其の判事の爲そ可き落着即ち罰金の言渡しハ撿事の之れを爲そとを續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百二條　撿事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨撿シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヿヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ撿事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ撿事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

參看　明治十四年九月廿日第四十六號布告

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヿヲ得サル旨記載有之候得共當分ノ內現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ撿事ニ送致ス可シ

第二百六條　撿事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時內ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ撿事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

參看　明治十五年十一月十三日第五十三號布告

治罪法第二百六條中二十四時內ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ內五日以內ニ於テスルコトヲ得

第二百八條　豫審判事ハ撿事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但撿事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條　撿事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルヿヲ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヿヲ得

第九節　保釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ撿事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヿヲ得

禁一更ふに判事よ之れを請求するあり是れ其の職分の權力を異よそる所あり 宣誓を用ふるとなく云々

是れ亦た其の權力の異ある所よーて檢事ハ只だ事實參考の爲め是れ等の申立てを聞くと雖とも之れをして誓ひ爲さしむるとなく只だ意見を述へて豫審判事よ送致そるあり ○第二百五條 但令狀を發するとを得す 是れ亦た其の權力の異ある所あり証憑意見書被告人を併て檢事よ送るも亦た之れよ同ー ○第二百六條 被告人を受取りたる時 即ち前條の例よ依り司法警察官より之れを受取りたる時あり 請求書 此の犯罪ハ斯ふの次第よ付き箇樣の處分ありたーと求むる所の書類あり、下も之れよ同ー ○第二百七條 解し又ハ存するとし 取消し又ハ其の儘よして置くと ○第二百九條 呼出すとを得 呼出しを爲そとを求むるあり、第百七條を見合そへー ○第九節 保釋 保釋

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ 保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムル可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ 又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ 保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ 又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲヲ得

參看 明治十四年九月廿日第四十七號布告

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親族又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシム可キノ證書ヲ其裁判所審記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

第十節 豫審終結

とハ逃亡の恐れあるを以て一旦拘留狀收監狀等を以て之れを引留めたる被告人又ハ其の親屬等の願ひに依り判事の見込みにて決して逃け匿れせず呼出しの節ハ必ず出頭そへきの証據を立てさせて之れを宿預けおそるを云ふ此ハ其の法式を定むるあり

○第二百十二條　金子を以て云々　金子を出して其の証據を立つるあり是れ其の証據を確かおそる爲めおして所謂る保釋金あり　○第二百十三條　貯金預所又ハ銀行の預証書　是れ皆現金の出來ぬ時其の代りおそれを納むるあり次の保証書も同ト譯けなり　資力身代、下も之れも同し　○第二百十四條　沒入　もつそると、下も之れも同し　○第二百十五條　民事の規則民事おに付くの訴訟手續を云ふ　徴收取り立つる、下も之れも同し　○第二百十七條　金額を還付す可し　初めおい被告人の違約して保釋金を沒收しられが爲めおに保釋金を沒收しられ其此の條に記

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

第二百二十一條　檢事ハ豫審充分ナラストシ思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一　犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二　被告事件罪ト爲ラサル時

三　公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四　確定裁判ヲ經タル時

五　大赦アリタル時

六　法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコヲ得ス

第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコヲ得ス

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アル

しさる箇條に當る者い元來豫審を必要とせざ又い常よ之れを用ひざる等被告人の身体を拘束そるとなく然るよ先きよ豫審の爲め之れを拘留ーたるい全く事の誤りよーて被告人の出廷せざるも豫審處分を妨げたる者よ非そ故よ此の場合よ於てい之れを還付そる者と定むるあり ○第十節 豫審終結 豫審判事の豫審の落着を付くる方法を示そるあり ○第二百二十一條 其條件 豫審充分ふざる廉々 ○第二百二十二條 檢事の意見如何なるを問す 檢事い素と犯罪あるを知て之れを起訴そる迄の職分よーて豫審判事い其の事のよしあしを判斷そるとおく唯ず其の事實の有無を吟味そる迄の職分あり故よ豫審判事い檢事の見込み何樣あるよ拘ふず自身の見込を以て其の捌きを付くる者と爲そありそ、下もこれよ同し ○第二百二十五條 釋放 勾留狀を發ーて之れを勾留そるあり ○第二百二十四條 放免 下もこれよ同ー 全く免ゆる第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ第二百三十三條 速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコヲ得 ○第二百二十六條 令狀を發す 勾留狀を發ーて之れを勾留そるあり ○第二百二十七條 由分をおそ等其の譯けを委く記す卽ち下もの三項是れあり ○第二百三十一條 現よ勾留を受くる云々 逮捕そると能いざる場合よーて現よ勾留を受くるよ非る者い卽ち令狀を遁れて逃亡ーたる者あり令狀を遁れ已よ令狀を遁れて逃亡したる者い自ら其の位地を失て其の權利を伸暢そるを得ざる者あり故よ豫審終結の言渡よ付て上訴そると許さゝるあり ○第二百三十二條 報

マテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコヲ記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示ヤ若ヤ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理ス可カラサルヿ及ヒ其原由又犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移ス

告之れを同ー　簡畧も之れを同ー

○第四章　豫審上訴

凡そ豫審の秘密を之れを行ふ者よりして原被對決等の事あるに其の双方亦た遵慮あーと云ふべからざる故を法律を於て檢察官被告人又は民事原告人等より上告を爲すことを許して其の方法手續を改むることあり之れと故障と云ふ去れ共其の故障即ち上訴と爲すこと二樣あり一は豫審中何時をも之れを許し一は終結の上へを非されば之れを許さず此の章其の法式を詳らかにするなり

第二百三十四條　棄却

第二百三十四條　左の場合に於ては檢事又は被告人より豫審終結に至るまで何時にても故障を爲すことを得

一　管轄違の申立を棄却したる時

二　法律に背きたる命狀を發し又は之を發せざる時

三　法律に背きたる保釋責付を爲し又は之を爲さゝる時

四　越權の處分あるに民事原告人は私訴に付き第四の場合に於て故障を爲すことを得

第二百三十五條　故障を爲さんとする者は其裁判所の書記局に趣意書を差出すべし

故障ありたる時は書記其趣意書の謄本を對手人に送達し對手人は三日内に答辯書を差出すことを得

故障に付ては豫審處分の執行を停止せず但保釋責付を爲したるに付ては故障ありたる時は其執行を停止す

第二百三十六條　故障は其裁判所の會議局に於て判事三名以上にて趣意書答辯書其他訴訟書類及び檢事の意見書に依り之を判決すべし

會議局の言渡は速に之を執行す但其言渡に對しては豫審終結の言渡ありたる後上告を爲すことを得

第二百三十七條　左の場合に於ては檢事被告人又は民事原告人より豫審終結に至るまで豫審判事又は其配偶者と被告人被害者又は是等の者の配偶者と親屬なる時

一　豫審判事被告人又は民事原告人の後見人なる時

二　豫審判事被告人又は其配偶者に於て民事原告人被告人又は是等の者の親屬より賄賂に非ざれば贈物を收受し若くは聽許し賴みを容れ下も之を同ー

三　豫審判事又は其配偶者と被告人又は民事原告人との間に訴訟ある時

第二百三十八條　忌避の申立は豫審判事に之を爲すべし但其申立を爲すには趣意書二通を書記局に差出すべし

第二百三十九條　豫審判事忌避の申立を棄却したる時は其申立人より故障を爲すことを得

會議局に於ては故障の趣意書及び豫審判事の辯明書に依り判

ずけて採用せぬと、越權　下も之れを同ー　持ち前の權力を過ぎたる餘分の事を爲すと、下も之れを同ー

○第二百三十五條　對手人

ある手の者、下も之れを同ー

○第二百三十七條　忌避

此の人い相手の身寄りにて其の裁決い必ず依怙の沙汰あるべしと思ふ時其の人をゐみさけて外の人の掛りとなることを願ふあり、賄賂　下も之をを同ー　贈物をくり之をを同し　聽許　賴みをき～を同ー

も之れ
ゟ同ー ○第二百三十
八條 認可差許そと、下も之き
ゟ同 職置ーまゐをく、
し 下も之れゟ同
し ○第二百三十九
條 辯明書斯々の譯
以て聞届難ーと其の理を
述べたる書面、下も之れ
ゟ同 ○第二百四十二
條 回避己れより身を
引て其の嫌疑
をさくると、下
も之れゟ同し ○第二
百四十五條 之れを
忌避するとを得ゼ

決ヲ爲ス可シ
第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ
棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖ドモ豫審ノ手續ヲ繼續ス
可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコヲ得ス
第二百四十一條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコヲ得
第二百四十二條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル
時ハ上告ヲ爲スコヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレ
ハ之ヲ爲スコヲ得ス
第二百四十三條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由
アルコヲ認メ又
避ノ申立ヲ爲ス
回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ
第二百四十四條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタ
ル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判
事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審
判事ノ爲シタル處分ト雖ドモ更ニ取調ヲ爲スコヲ得
第二百四十五條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨ
リ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコヲ得
第二百四十六條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避

判事ハ訴訟ヲ判決ー書記
ハ調書を作り報告を爲そ
者故其の嫌疑を忌避そる
を得る者とそれ共檢事ハ
此れ等の職分をく唯ざ犯
罪を証明そるの職掌故仮
令ひ不良の心ある共之れ
を恣まゝよそるとを得ゼ
故ゟ之れを忌避そるとを
得ゼとするあり但た其の
自ら退て回避そる
ハ之れを許そなり ○第
二百四十七條 故障
の期限其の事を知りて
より故障を爲そ
までの間即ち申立書
と差出を日限あり
第二百四十八條 申
立書 故障と爲そ可き申
と申ー述へたる

スルコヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ
會議局ニ申立ツルコヲ得
檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立
ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ
第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲ス
コヲ得
民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言
渡ニ對シ故障ヲ爲スコヲ得
被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコヲ得輕
罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事
ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレ
ハ故障ヲ爲スコヲ得ス
第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達ア
リタルヨリ之ヲ起算ス
第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申
立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス
可シ
故障申立人ハ三日內ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辨書

即ち届け書の如き者あり、下も之れよ同し趣意書上訴の廉々の趣意と述へたる書面、下も之れよ同ー

○第二百四十九條　附帶の故障

双方共よ言渡ーと受けたるよ其の相手より不服と云ひ故障と爲ーたる時此方よても亦た之れよ付け添へて己れの不服故障と云ふ之れと附帶の故障と云ふあり、下も之れよ同ー

○第二百五十條　共犯の起訴を受けさる者

共よ惡事と爲ゑたる中よて未た告訴告發とされぬ者

ヲ差出スコヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スコヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達スヘシ對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スコヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限內又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出スヘシ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲スヘシ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スコヲ得

第二百五十三條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシムヘシ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公訴受理スヘカラサルコヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スコヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシムヘシ

檢事ハ意見書ヲ差出スヘシ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決スヘシ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スヘシ

第二百五十七條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スコヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達スヘキ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ記載スヘシ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナカルヘシ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

者

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致スヘシ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スヘシ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲スヘシ

參看　明治十五年五月二日司法省丙第十八號達

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廷ノ地ノ監倉ニ移ス時ハ檢事ハ前令狀ニ檢事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ重罪裁判所檢察官ニ送致シ其檢察官ハ是等ノ書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲スヘシ其他法律ニ從ヒ被告人ヲスル義ト心得可シ此旨相達候事

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

○第二百六十條　罪名の變更ある も同一の事件　初め故殺の訴へありたる者過失殺傷の名を以て再び訴へ出つるの類、此の如き者と採用する時は一事件の惡事よ唯た其の名を改めて再々の公事を起し終るよしの訴訟のやむとあきよ至るべし故よ此れ等の訴へを爲そとを禁そるあり

○第四編　公判　重輕罪違警罪裁判所よ於て豫審終結の言渡し或ハ豫審あく直よ起訴ありたるよ因り又ハ上等の裁判所より移されたるよ因り其の犯罪の本吟味と爲その方法手續と定むるあり

○第一章　通則　下も第二章より第四章迄の三箇の裁判所よ於て扱ふ所の法式と取り束ねて之れと此よ示そあり猶や第一編よ總則と置くか如し

○第二百六十一條　簿冊帳面、下もげんしゅくへらし之れよ同し　減縮ちぢむる、下もこれよ同し　重要ある事

第四編　公判

第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコヲ得

第二百六十三條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ラサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ渉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコヲ得若シ出廷シテ辯論スルコヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

由大切の事柄　○第二百六十三條　之を公行す

公行とは公衆の聽聞を許すの前よりて之れを行ふあり凡そ豫審は罪の有無を定むる所故一度其の吟味を受て後赦免とある者あり此れ等を公けよすれは後日本人の疵とあり又た罪人よ知らそる時は其の證據を匿そ等の事あり故よ之れを行ふよ必す秘密を以てすを共已よ其の證據の充分ある上は之れと夫々の裁判所よ移し其の判決を公衆の前よ行ふあり是を其の罰と世人に知らせく其の戒めとなし又た裁判官に偏頗の扱ひ無らしめんか爲めあり

第二百六十六條　被告人は辯論の爲め辯護人を用ふるを得

辯護人は裁判所々屬の代言人中よりこれを選任す可し但裁判所ノ允許を得

第二百六十七條　被告人公廷に於て暴行又は喧噪を爲し辯論を妨礙する時は裁判長よりて再度告戒を爲すも仍ほ之に從はさる時は檢察官の請求に因り又は職權を以て被告人を退廷せしめ若し其塞癒の後更に取調を爲す可し

第二百六十八條　被告人精神錯亂又は疾病に因り出廷する能はさる時は塞癒に至るまて辯論を停止す

辯論に取掛りたる後被告人精神錯亂したる時は其塞癒の後新に辯論を爲す可し其他の疾病に罹る時は塞癒の後前に停止したる手續を爲す可し但五日間辯論を停止し又は檢察官其他訴訟關係人の請求ありたる時は新に辯論を爲す可し」

若し被告事件及ひ法律の適用に付き既に辯論を終りたる時は其塞癒の後更に取調を爲す可し

第二百六十九條　禁錮以上の刑に該る可き被告人公判の日時に出廷せさるとき又は豫審終結の言渡書又は呼出狀を本人に送達したるの證明ありたるときと雖も豫審終結の言渡書又は呼出狀を本人に送達したるの證明なきときは裁判所に於て猶豫の期限を定め其期限内に被告人出廷せさる時は闕席裁判を爲す可きの告知書を親屬若くは戸長に送達す可し

第二百七十條　闕席したる被告人に付ては辯護人を用ゆるを許す但其親屬故舊は被告人の出廷する能はさるの事由を證明する時は此限に在らす

裁判所に於ては其事由を正當なりとする時は檢察官の意見を聽き裁判を延期するを得

第二百七十一條　被告人中の一名又は數名出廷せさるとき雖も出廷したる者に付ては通常の規則に從ひ對審裁判を爲す可し

第二百七十二條　裁判長は公廷に於て諸般の取締の爲め相當の所置を爲す可し

稱讃誹謗其他辯論を妨礙する者あるときは之を制止し又は退廷を命することを得

第二百七十三條　公廷に於て輕罪違警罪を犯したる者あるときは

○第二百六十四條　傍聽　下も之れよ同し

○第二百六十五條　身体の拘束　からだをいましむると腰繩手錠をかくるの類

對審　として云々　被告人己れの勝手よりて辯論を爲さゝる時は原告の申立よ異議なき者と見做し已よつき合せの濟みたる者として其の言渡しを爲すあり

○第二百六十六條　選任　ありよまかせるあり、下も之れよ同し　○第二百六

十七條　喧噪（けんそう）　立つと再度（さいど）告戒（こくかい）二度まて差止むると退廷（たいてい）白洲を退くと、下も之をよ同し○

第二百六十八條　痊癒（せんゆ）本復す○第二百六十九條　豫審（よしん）終結（しゅうけつ）の言渡書（いひわたししょ）云々　禁錮以上の刑よーて公判の日時よ出廷せざる者ハ逃亡ーたる者あり逃亡ーたる者其の以前よ豫審言渡書又ハ呼出狀を受取たる上ハ己よ其の本裁判あるとを知りたる者あり之をを知あざら逃亡ーて出廷せざるハ已よ其の身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ナニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷內ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スコヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直ナニ控訴又ハ上告ヲ爲スコヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スコヲ得」豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スコヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ同避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スコハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ同避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シ

上之れを輕罪裁判所より引渡すべき者とす　上等の裁判所　重罪裁判所控訴裁判所高等法院大審院等を總稱す、是等の裁判所よりても直ちに終審の裁判を爲すべき唯た輕罪のみよりて重罪の次に定めたる如く通常の手續即ち豫審等の手順を用ひたる上にて其の裁判を爲すべきなり是れ重罪の必ず改めて公訴狀を作り又た必ず五人の判事を用ゆる等の規則あるを以てなり　○第二百七十九條　豫審を爲したる裁判官云々　初め一旦其の裁判に與りたる判事の再び其の事件に與つかるべき已に第四十六條に禁したる所なり故に箇樣の場合に於ては檢察官其他訴訟關係人等より忌避の申立てを爲すことを許すなり　○第二百八十二條　新に辨論を爲す　新規に初めより仕直すなり　○第二百八十四條　朗讀　よみあげると、下も之に同し　○第二百八十五條　說明　說き分くると、下も之れに同し　○第二百八十六條　比較　見くらふると、下も之れに同し

タル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルコトヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得

參看　明治十五年三月廿二日司法省丙第十號達

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスル時ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ誓ヲ陳述セシム可シ此旨相達候事

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出ス時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條　第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルコトヲ得

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

し ○第二百八十八條 言語を接す可からす 言を交へて話しをそるとを禁そるあり是れ其の相談して事をかくそ等を防くあり ○第二百九十條 氏名目錄帳 ○第二百九十一條 求むるを得 自から訊問するよ非す裁判長の訊問そるを求むるあり ○第二百九十二條 不實よして云々 刑法第百十八條以下を見合そへし ○

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問スル可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スコトヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上壹圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

第二百九十三條 被告人闕席云々 被告人の請求よ依り呼び出したる證人出廷せそと雖とも其の被告人も亦た出廷せさる時ハ別よ差支へよも成ふぬ故其の罪となふさる者とそるあり ○第二百九十四條 其の言渡を受けたる者云々 證人出廷せそして罰金科料の言渡と受けたる者前呼出狀送達の後ち三日の內よ出廷そることと能とさりし尤もある譯けを述へてあかりを立てたる時ハ其の言渡しを取消そあり但た重罪の

其言渡ヲ受ケタル者三日內ニ出廷スルコト能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタルトキハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ爲シタル時ハ裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

檢察官ヲ其請求ヲ爲サヽル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ